

(資料)

プラトン『パイドーン』篇内容梗概

水* 崎 博 明

第一章 (57a1-57c5)

エケクラテース、パイドーンに対しソークラテースの死の様子を尋ね、その裁判の時と刑死の時との隔たりの不思議を問ふ。

第二章 (58c6-59c7)

ソークラテースの死に立ち会った者としての不思議な感情のこと、立ち会った人々

第三章 (59c8-60c7)

ソークラテースの牢獄に入って——クサンティッペーの悲しみとソークラテースのヒューモアと

第四章 (60c8-61b7)

ソークラテースのアイソポスの物語りの詩作化の理由

第五章 (61b7-61e4)

死の望ましさと自殺の不当といふ一つの矛盾

第六章 (61e5-62c8)

秘教的言説から——神々の所有物としての人間存在

第七章 (62c9-63b3)

神々の配慮と哲学者の死の急ぎとをめぐる疑問の中にあって

- 第八章 (63b4-64a3) ソークラテースの信仰告白とその真実によるソークラテースの弁明の余地、クリトーンへの氣遣ひ
- 第九章 (64a4-65a8) 哲学者が死と死の完成とを指すといふことは
- 第十章 (65a9-66a10) 哲学者の関心事たる智慧の獲得そのことの遂行とは
- 第十一章 (66b1-67b6) 肉体といふものが哲学の営みへともたらす様々の重荷から真実の哲学者が思ふ思ひ——問道を行くこと
- 第十二章 (67b7-68b7) 「魂」の浄化をこそ希求する哲学者が死に際してもなほ泰然自若たる理由について
- 第十三章 (68b8-69e5) 真実の価値である〈思慮〉をこそ目指す徳と打算のみのまやかしの徳とを語りながら、「弁明」を確認す。
- 第十四章 (69a6-70c3) 死後の魂の確在へのケベースの疑問提出とソークラテースの対応
- 第十五章 (70c4-71b11) ソークラテースの問題設定と「輪廻転生の説」による問題分析への着手
- 第十六章 (71c1-72a8) 反対・反対の持つ二つの生成過程・その含意としてのハデースにおける魂の存在
- 第十七章 (72a9-72e2) 帰謬法による二つの生成過程の存在とその存在の承認からの死者の魂の存続の確認
- 第十八章 (72e3-74a1) 魂の前世での存在を証明すべき論拠としての想起説のトピックへ
- 第十九章 (74a2-75c6) 想起説とその含意する我々の魂の生前における彼のものの知識の獲得
- 第二十章 (75c7-76a8) 我々の魂の生前における知識の獲得とその携への続行と喪失、及び想起による回復
- 第二十一章 (76a9-76d6) 我々の前世で獲得した知識の携へはどう帰結してゐるか。想起の線のみたること
- 第二十二章 (76d7-77b1) 前世における『あり』（ウーシアー）の存在と我々の魂の存在との同等の必然性

- 第二十三章 (77b2-77d5) 魂の我々の死後の存在は未証明ではないかとの疑問と形式的な回答
- 第二十四章 (77d5-78b3) 死の恐怖を追ひ遣るべき呪ひ歌の探し求めの必要
- 第二十五章 (78b4-79a5) 存在の二系列・・合成的・変容的・感覺的と非合成的・同一的・思考の推理的
- 第二十六章 (79a6-79c1) 「あるものども」の「見られるもの」と「見えぬもの」への二分と肉体と魂
- 第二十七章 (79c2-79e7) 「あるものども」の二つの取り扱ひと魂がそれにこそ親しいもの
- 第二十八章 (79e8-80b7) 承前——「あるものども」の二分と魂・肉体が各々類似するもの
- 第二十九章 (80b8-81a11) 我々の死後、魂は雲散霧消しはせぬかと恐れてゐたシミアースの恐れに回答する。
- 第三十章 (81b1-81e2) 不浄な魂の物的なものに囚はれ続けるその終始のこと
- 第三十一章 (81e2-82d8) 不浄な魂の繋がる先のそれぞれについて
- 第三十二章 (82d10-82d7) 神々の一族へと至るといふ智慧に親しむ者の定めのこと
- 第三十三章 (82d8-83e4) 智慧に親しむ営みの道標のあり方
- 第三十四章 (83e5-84b8) 真実に学を好むものの努力
- 第三十五章 (84c1-85d10) 反論の勧めと今を不幸とは思はぬ白鳥の予知の歌にも同じソークラテースの予知
- 第三十六章 (85e1-86d4) 「魂＝ハルモニアー」説の提出による魂の死後の存在への疑問
- 第三十七章 (86d5-88b8) ケベースの疑問——人間と衣服の比喩
- 第三十八章 (88c1-89c11) 疑問が提出されての一同の気持ちとソークラテースの姿

- 第三十九章 (89c11-90d8) 言論嫌ひを用心すべきだとのソークラテースの諭し
- 第四十章 (90d9-91c5) ソークラテース、これからの議論のためを思って弁ずる。
- 第四十一章 (91c6-92e3) 二人の疑問点の再確認と「想起説」を採るシミアースの「魂||調和」の撤回
- 第四十二章 (92e4-94b3) 「魂||ハルモニア」説の退けの議論
- 第四十三章 (94b4-95a3) 魂・その支配し指導し統御し肉体の諸情態に反対するもの
- 第四十四章 (95a4-95e6) ケベースの問題の核心を確かめる。
- 第四十五章 (95e7-97b7) 「生成消滅一般」の原因の追求の必要とソークラテースの経験
- 第四十六章 (97b8-98b6) アナクサゴラスの「知性(ヌース)」原因説へのソークラテースの大きな期待
- 第四十七章 (98b7-99d3) アナクサゴラスの「ヌース原因」説への失望とソークラテースの第二の航海法
- 第四十八章 (99d4-100a9) 第二の航海法としての「ある」とされるものどもの真実の言論における考察
- 第四十九章 (100b1-102a9) 言論における「ある」とされることども真実の考察
- 第五十章 (102a10-103a3) 反対関係にあるものそれ自体の反対の非受容と我々の中のその同様の非受容
- 第五十一章 (103a4-103c9) 「反対の事物」と「反対そのもの」との相違
- 第五十二章 (103c10-104c10) 「形相そのもの」の「反対」の非受容と「形相を持つもの」のそれと
- 第五十三章 (104c11-105b4) 雪・火・三・二・一・魂など「反対の一方」を持つものの定義
- 第五十四章 (105b5-105d12) 「魂」が身体にもたらす「生」はその「生」に反対の「死」を受け入れない。

- 第五十五章 (105d13-106d4) 「魂」の「不死」からその「不滅」へ
- 第五十六章 (106d5-107b10) 「魂」の不死と不滅の結論を確かめつつも、なほそこに残される問題を言ふ。
- 第五十七章 (107c1-108e5) 「魂」の世話の全永劫の時のためたることを説くあの世での賞罰の神話
- 第五十八章 (108e5-110b4) ソークラテース、「大地」について神話を語り始める。
- 第五十九章 (110b5-111e3) 「大地」の表面に見出される美についての神話
- 第六十章 (111e4-112c3) 「大地」の内部の多くの地域についての神話
- 第六十一章 (112e4-113c8) 特筆すべき四つの大河
- 第六十二章 (113d1-114c8) 再び死後の定めについて
- 第六十三章 (114d1-115a8) 神話(ミュートス)を語り終へて
- 第六十四章 (115b1-116a1) ソークラテースを埋葬出来るか。美しく語るべき論し
- 第六十五章 (116a2-117a3) 家族への言ひ残し、刑務委員の下役の讃嘆、彼への讃嘆、死を迎へる矜持
- 第六十六章 (117a4-118a14) 毒杯を仰いで後のソークラテースと一同と
- 第六十七章 (118a15-17) 結び

第一章 (57a1-57c5) エケクラテース、パイドーンに対しソークラテースの死の様子を尋ね、その裁判の時と刑死の時との隔たりの不思議を問ふ。

1. エケクラテース、パイドーンに先づ問ふ、ソークラテースの刑死の日にパイドーン自身がその場に居合はせたのかどうか」を。対して「然り」とのパイドーンの答へ

2. 次いでまた、エケクラテース問ふ、「ソークラテースの死を前にしての言葉と様子と」を。プレイウスの地での自らの情報不足を啣しながら。

3. パイドーンがソークラテース裁判についてのエケクラテースの知識を問ふのに、エケクラテース、ソークラテース裁判の時とその刑死の時との隔たりの不思議を問ひ返す。

4. パイドーンによるその事情の説明——デーロス島への祭使派遣とその間の不浄の忌ましめといふ慣習の存在

第二章 (59c6-59c7) ソークラテースの死に立ち会った者としての不思議な感情のこと、立ち会った人々

1. ソークラテースの刑死の様子と居合はせた人々についてのエケクラテースの問ひとパイドーンのそれらを語りまた聞くにつけての喜びの表明

2. パイドーン、ソークラテースの死に臨んだ時の不思議を言ふ——ソークラテースの泰然自若と気高さ、人々の苦痛の混淆

3. 居合はせた人々たち——アポロドーロス、クリトブローロス、クリトーン、ヘルモゲネース、エピゲネース、アイスキネース、アンティステネース、クテーシッポス、メネクセノス、その他のアテーナイ人（プラトーンは病氣中）、テーバイのシミアース、ケベース、バイドンデース、メガラからの客人のエウクレイデース、テルプシオーン（アリストイッポスとクレオンプロトスはアイギナ島に滞在）

第三章 (5908-6067) ソークラテースの牢獄に入って——クサンティッペーの悲しみとソークラテースその人のヒューモアと

1. 牢獄を訪れた日々の様子と刑死する日
2. 牢の中へ入って眼にした光景——クサンティッペーの言葉、ソークラテースによるその送り返し
3. 足枷を解かれたソークラテースのヒューモア——一つの頭の二つのもの「快樂・苦痛」（アイソポスの物語りの想像）

第四章 (6068-6117) ソークラテースのアイソポスの物語りの詩作化の理由

1. ケベースの質問——アイソポスの物語りの詩作化は何故とのエウエーノスの問いを言って
2. ソークラテースの答へ——「ムッサイの術をなしそれを仕事とせよ」と告げる夢見の意味を哲学の励ましであると解釈した以前の解釈から、それは一般の文芸の勧めだと解釈し直したこと、そして詩人は詩人たるべくはミュートスをこそ詩作すべきであ

りロゴスを詩作すべきではなく、そして自分はミュートス語りではないのだからと、かう心に思ったこと

第五章 (61b7-61e4) 死の望ましさと自殺の不当とといふ一つの矛盾

1. ソークラテースのエウエーノスへの「ソークラテースの後を出来るだけ早く追ふべし」との伝言

2. シミアースのエウエーノスの不服従の予想と対するソークラテースの発言

イ、哲学者であれば死を急ぐべきこと

ロ、自らへの死の強制の不当

3. ケベースの右のソークラテースの発言の含む矛盾に対する疑問の表明

4. 対するソークラテースの回答

イ、ピロラオスにその点の言論があること

ロ、ソークラテースの伝聞からする語りとその語りの目下の相応しさ

第六章 (61e5-62e8) 秘教的言説から——神々の所有物としての人間存在

1. ケベース、なほ疑問を再言する。

2. ソークラテースもまた右の矛盾を再言し、ケベース、我が意を得る。
3. 秘教的言説
 - イ、人間の生の何者かによる見張り、自己解放と逃亡との不可
 - ロ、神々の人間らへの配慮と人間の神々の所有物たること
 - ハ、右の故の、所有者の死の望みの必要の絶対

第七章 (629-633) 神々の配慮と哲学者の死の急ぎとをめぐる疑問の中であって

1. ケベースになほ残る疑問——「神々の配慮」とはその配慮からの逃亡を許さぬものだから、何故哲学者は死を求めてそのよき配慮を捨て去るのであるか。思慮なき者こそが神のそのよき配慮を逃れるはずだ。
2. ケベースの疑問提出への二つの反応
 - イ、ソークラテースの反応——ケベースの飽くなき問題追求の態度への喜び
 - ロ、シミアースの反応
 - α ケベースの疑問への同意
 - β ソークラテースの死に際してのその泰然自若への疑問
3. ソークラテースの弁明の同意表明

第八章 (637-643) ソークラテースその人の信仰告白とその真実からするソークラテースの弁明の余地、クリトーンへの気遣ひ

1. ソークラテースがこれから赴かうとする彼の地での賢明にして善良な神々とこの世の人々らよりも優れた今は亡き人間たちとが待ってゐることの、信仰の打ち明け、但し

イ、後者の期待は余り強くは断言しない。

ロ、前者の期待は強く断言する。

ハ、死者たちには何かが待つのであり、その場合、善き人々には悪しき人々よりもずっと善いことが待ってゐる。

2. シミアース、その信仰の表明をうけて

イ、ソークラテースはその信仰をシミアースたちにも分かち与へる積りであるのかどうか、その信仰は福音だとも思はれれば。

ロ、その信仰が真実でもありその信仰についてシミアースらを説得出来れば、そのことがソークラテースの弁明たり得る。

3. ソークラテースのクリトーンの様子への配慮

4. クリトーンの答へ——毒を与へる役目の者のソークラテースが話し過ぎて身体に熱を持たせぬやうにとの注意依頼

5. ソークラテースの無頓着の答へと本格的な弁明への移行

第九章 (62a4-65a8) 哲学者が死と死の完成とを目指すといふことは

1. 前章の5に続き

ロ、真正の哲学者は死に望み泰然自若とし死後の最大の祝福を信ずる理由の説明

α 真正の哲学者の努力は死に行くことと死の完成とである。

β この事実は余人のもって知らぬところである。

γ もしαこそが真実であれば全生涯にわたり熱望して来たことの到来にあたり、その実現を前に歎くは奇妙

2. シミアースの笑ひ——哲学者は死人同然の人間だとし哲学者は死ぬに相応しい人間だと承知する一般の人々からの得心は請け合ひである。

3. ソクラテース、シミアースの笑ひを受けて

イ、一般の人々の哲学者を死者も同然とする発言の形式的な尤もらしさの承認

ロ、「自分たちにもよく分つてゐる」とする場合のその内実に関しての不当の指摘

α 哲学者たちが如何なる意味で死者も同然であるか、如何なる意味で死ぬに相応しいのか、その死とは如何なるものであるかは、およそ一般人のよく知るところではない。

β それ故、その点を我々の間で話し合ふことにしよう。

4. ソクラテース、先づは問ひを始める。

プラトン『パイドーン』篇内容梗概 (水崎)

イ、「死」とは或る何ものかである。

ロ、「死」とは魂が肉体から離れ去ること

ハ、「死んだといふこと」——肉体が魂から離れて肉体だけになり、魂は肉体から離れて魂だけであること

5. ソークラテース、その死に臨んでの泰然自若たる態度の弁明のためにも、次いで問ふ。

イ、智を求めて止まぬ哲学者は所謂「快樂」に熱中するか。飲み食ひ、肉欲など。否。

ロ、身体に関するいろいろな顧慮の重大視、否。

ハ、哲学者の専心する対象は肉体にはなく、出来るだけ肉体から離れて魂の方に向けられる。

ニ、総括して——哲学者は以上の如き事柄において他の人間たちとは違ひ、自分の魂を出来るだけ肉体との結びつきから解放しようとする。

ホ、それ故の哲学者の一般人たちへの見え方——肉体をめぐる快樂に楽しみを見出すことなくそれらに与り知らぬ人間は生きてゐるだけの価値がない、死んでゐるに近い。

第十章 (65a9-66a10) 哲学者の関心事たる智慧の獲得そのことの遂行とは

1. 次いでソークラテース、「智慧の獲得」といふ哲学者の直接的な関心事について自問自答する。

イ、問ひ——真実の探求に際し肉体との共同は有益か、妨害になるか。

ロ、答へ——「見聞すること」がそのまま人間に何らかの真実を教へるかについては詩人たちでさへそれは何一つ定かならずと
してゐる。

ハ、見聞きといふ肉体的な感覚の中で最も鋭い感覚がさうであれば、ましてその他の程度の低い感覚は無用
2. 右の確認を踏まへ、ソークラテース、魂は如何なる時にこそ真実に触れるかを問ふ。

イ、肉体との共同においては魂は肉体に欺かれるからには、それは思惟のはたらきのうちにおいてこそ

ロ、思惟のはたらきは魂が肉体的な何ものにも煩はせられることなく肉体を振り切って純粹に魂そのものとなり、ひたすらもの
の真実を目指して憧れ努力する時にこそ最もよく行はれる。

ハ、すなはち、ここでも哲学者の魂は肉体を蔑視してそれから逃れ、純粹に魂そのものだけにならうとする。
3. 更に

イ、それ自体としてあるものの承認

α 『正しさ』そのもの

β 『美』『善』

ロ、それらのものの肉眼で見ることの不可能の確認
ハ、右のイロの一般化

α 『まさに各々のものであるところのもの』として定式づけられるそのすべてのものの本質『大きさ』『強さ』『健康』などは、
肉体を介する感覚によっては触れられない。

プラトン『パイドーン』篇内容梗概（水崎）

β 考察の対象となる一つ一つのを純粹にそれ自体として思考の中に捉へることを最もよくかつ最も正確になし得るやうに自ら準備してゐる者、その者こそそれぞれのものの認識に最も近く進む。

ニ、総括的結論——最も明晰な認識を得る人とは

α 思考それ自体だけを用ゐてそれぞれの対象に迫り、眼に見える何かを思考のはたらきの中に持ち込むことも、その他何らかの感覚をひきずり込んで思惟と一緒にすることも拒否するやうな人

β 純粹な思考それ自体を用ゐながら一つ一つの実在をその純粹な姿のままにそれ自体として追求しようと努め、目からも、耳からも、更に全肉体からも、これらとともにあれば魂を攪乱されて眞実と智慧の獲得は叶へられぬと考へて、出来るだけ離れる人

第十一章 肉体といふものが哲学の営みへともたらず様々の重荷から、眞実の哲学者が思ふ思ひ——問道を行くこと

1. 肉体ゆゑに哲学活動が受ける様々の障害と負担のこと

イ、肉体とともにある限りは哲学者の憧れる眞実の獲得は叶はないこと

ロ、だが、肉体の養ひは人には不可避であること

ハ、更に、病氣からする障害・負担

ニ、愛欲・欲望・恐怖などからの幻影と愚かしさとの充満とによる哲学的思索の停止、すなはち、肉体への隷属から余儀ない財

貨獲得といふ目的ゆゑの戦争

ホ、僅かな閑暇における考察も肉体ゆゑの障害が必至

2. かかる事態の要求すること——肉体から離脱して魂そのものによって事柄そのものを見ること

3. 右への理由

イ、智慧は我々の死においてこそ我々のものとなるのであり、生前にはなり得ない。

ロ、かく肉体とともにあつては我々は純粹に知識し得ぬからには、およそ知識の獲得とはあり得ないことであるか或いは死後に

初めて可能になるかであらう。

ハ、それ故、浄化の途の中で我々の肉体との絆の神による解放を待つことこそが、知識への接近である。

ニ、我々は、我々が清浄になってこそ、また清浄なるものそのものとともにあり得るのである。

4. ソークラテースの対話者シミアースへの共感の求め

第十二章 「魂」の浄化をこそ希求する哲学者が死に際してもなほ泰然自若たる理由について

1. ソークラテース、あの世に到着して後なす獲得の大なる希望とそれ故の旅立ちの期待とを述べる——その精神を浄化した者と
して

2. すなはち、ソークラテース、この今にその死に際して泰然自若たり得る理由を説く。

イ、浄化（カタルシス）とは何か。それは魂の可能な限りの肉体からの分離であり、自己自身のうちに凝集しかつ結果して自己自身だけで住まふやうに習慣づけることである。

ロ、魂の肉体からの分離とは、すなはち「死」である。

ハ、真正の哲学者こそがこの魂の肉体からの解放を切望する。

ニ、それ故、生涯に渡り自己の生き方を死に近付けるやう習熟して来た者が死が遣つて来た時にそれを歎く理由は何もない。

3. ソークラテース、再度、総括的に同じ話しをする。

イ、真正に哲学する人々は死ぬことを練習してをるのであり、死ぬといふことは彼らにとつては人々の中で最も僅かしか恐ろしいことではない。

ロ、右の理由

α 魂の浄化を願つてゐるならその機会の到来を恐れ歎くのは、あの世では智慧に行き合ひ相争つて来た肉体と無縁になり解放される望みもあれば、不可解である。

β 愛する人々を追つてハデースの国に行った人々は、愛する人々の姿を目にし一緒に希望をもってこそさうもしたのであれば、同様に心底から智慧に恋焦がれる者もさうした希望を持つはずであるから、死を歎き悲しみあの世に行くことを喜ばないといふやうなことは馬鹿げてゐる。

γ 真実に智慧を愛してやまぬ哲学者の思想はさうしたものであるはずである。

第十三章 真実の価値である〈思慮〉をこそ目指す徳と打算のみのまやかしの徳とを語り、「弁明」を確認する。

1. 以上からする結論——死に臨み悲しむ者はピロソポス（愛智者）に非ずピロソーマトス（肉体を愛する者）であり、彼は恐らくはまたピロクレーマトス（金銭を愛する者）かピロティモス（名誉を愛する者）かそれらの両方であるかであらうこと
2. 〈勇氣〉や〈節制〉が真実その名に価ひしてさう呼ばれる場合と打算のみから結果して来る場合との対比のこと

イ、真実の〈勇氣〉や〈節制〉であるもの——〈勇氣〉は死に際して上述のやうな態度を取る人々にこそ相応しく、〈節制〉は最大限に肉体を軽視して知の追求のうちに生きる者にもみ相応しい。

ロ、打算のみからする帰結——死よりも一層大きい禍ひへの恐怖からこそ死を甘受し、別の快樂の奪はれの故に別の快樂を退ける。（すなはち、そこには〈恐怖〉の故の勇氣と〈放縱〉の故の節制があるのみ）

3. 真実にあるべき真剣な打算のこと——快樂に快樂を苦痛に苦痛を恐怖に恐怖を交換してもそこには何一つ真実な価値は生まれない。真実の価値がそこに生まれるのは、ただ〈思慮〉の獲得のためにこそ一切が差し出されるやうなその時こそである。そこには〈魂の浄化〉こそが存在する。

4. 秘儀を定めた人々のかける謎のこと——真実にバツコススの友がらである人々の少ないこと

5. バツコススの友がらについてのソークラテースの解釈——真実に智慧を愛した経験のある人々

6. ソークラテース、自らの哲学的な努力を思ふ。

7. 以上の語りの確認——それは「死に際して動じない」といふことの弁明であった。

第十四章 死後の魂の確在へのケベースの疑問提出とソークラテースの対応

1. 人々の一般的な疑念を代弁してのケベースの疑問提出と要求

- イ、疑問・・・肉体から離れた魂は何処にも存在しないのではないか、死後の魂の雲散霧消と滅亡、
ロ、要求・・・ソークラテースの上述の「魂の自己結集と悪からのその浄め」の説の与へる希望も、保証と証明とが必要。

2. ソークラテースの対応・・・ソークラテースの説はあり得べきかどうかについてのミュートロギアー（話し合ひ）すなはち、
考察

第十五章 ソークラテースの問題設定と「輪廻転生の説」による問題分析への着手

1. ソークラテースの問題設定と設定後の古来からの説の着想

- イ、問題設定・・・ハデースには死者たちの魂が存在するか否か
ロ、古説の着想・・・輪廻転生（この世から彼の世へ、そして彼の世からこの世への魂の移り続け）
ハ、古説からの帰結・・・あの世での魂の存在（…あの世に存在してこそこの世に再生するのだから）
ニ、問題の核心の指摘・・・魂のハデースにおける存在の如何は輪廻転生の説の全うこそが証明すること
2. 右の本質の一般的な検討としての「反対関係にあるもの」の反対からの生成といふ問題の把握

イ、一人人間の場合のみの生成のみならず生成一般に関して問題を設定すべきこと

ロ、その問題設定では「反対関係にあるものの一方の反対の他方の反対からの生成の如何」の考察ともなること

ハ、ロの例示・・・美と醜、正と不正

ニ、甲と乙とが反対ならば甲は必ずその反対の乙のみから生まれ、それ以外からは生まれないのであるかが問題の要点

3. 右のニが問題の要点と見て広く一般的に検討して確認する

イ、一般的な検討・・・「ものが大きくなる」とはすなはち「より小さかった状態」から、「ものが小さくなる」とは「大きかった状態」から、「弱いものとなる」とは「もっと強かった状態」から、「速いものとなる」のは「遅い状態」から、「悪くなる」のは「善いもの」から、「正しくなる」は「不正なもの」から

ロ、確認・・・すべては反対のものから反対のものが生まれる

4. 相反するものの両者の間の二つの生成過程の存在の確認

イ、例示・・・より大きなものとより小さなものとの間で「増大」「減少」の過程がある。

ロ、二つの過程の動詞的な表現の有無といふことと有無に関はらぬ過程そのものの存在の確認

第十六章 反対・反対の持つ二つの生成過程・その含意としてのハデースにおける魂の存在

1. “生きてゐること”への反対の存在の如何、「目覚めてゐる」には「眠ってゐる」があった

2. 回答・・・存在する。それは“死んでゐる”である。
3. 右の「反対なるものども」がまさに反対であるならば意味されること
イ、相互から生ずること
ロ、二つの生成過程が存在すること
4. 3の認識に立ち（覚醒－睡眠）と（生－死）と反対二つの対の名前と二つの生成過程について
イ、ソークラテースは一つの反対を〈覚醒－睡眠〉がその名前だとし、「就眠」「覚醒」を二つの生成過程とする。
ロ、対してケベース
 - α 「生」に「死」が反対であること
 - β それらは相互から生ずる。
 - γ 故に、「生者」からは「死者」が、「死者」からは「生者」が生ずる。
 - δ 右の後半部分は「我々の魂がハデースにあること」を意味し前提にする。
 - ε γの二つの生成過程のうち前半の“死ぬ”過程は明確
 - ζ 後半の生成過程の問題を問ふ。
5. 問ひへの回答・・・その生成過程とは“生き返ること”である。
6. 5のイムプリケーションを語る。その生成過程を保証すべき魂の何処かでの存在

第十七章 帰謬法による二つの生成過程の存在とその存在の承認からの死者の魂の存続の確認

1. 以上の同意への帰謬法による傍証

イ、不合理だと目される仮定・・・一方向への生成を補ふべきもう一つの生成といふものが存在せず生成はただ直線的に一つの方向だけで行はれる。

ロ、その場合の帰結・・・最後に万物はことごとく同一の形態と同一の状態に帰し、生成は最早止む。

ハ、右の帰結の不合理の指摘

2. 右の論証がそのままたる例(その一)

イ、就眠の過程だけが一方的にあり覚醒の過程がこれに対応しない。

ロ、万物は最後にすべてが眠り続け、従って彼のエンデミオンも彼だけが特別ではないことになる。

3. 右の論証がそのままたる例(その二)

イ、結合の過程のみがあることになり分離の過程はないといふ過程

ロ、彼のアナクサゴラスの言葉「万物は混沌としてあり」が実現する。

4. 右のやうなことは許容さるべくもないことだからして、すべてが一つの方向へと消費されるだけの運動を否定して前世からの世への回帰の運動を想定することは、必然的なことである。すなはち、前世における魂の存在

1. ケベース、魂の前世での存在といふ右の結論はまた、学び知ることとは想起することだといふ「想起説」からも導かれようとの示唆をなす。

2. その「想起説」についてのシミアースとケベースとの遣り取り

イ、シミアースの問ひ・・・それはどういふものであったか、今はよく覚えてはゐないこと

ロ、ケベースの回答

α もし人がよく問ふならばよく問はれた者はすべての事柄の真実を独力で答へ得ること

β だがそれは知識やその語りが予めその答へ手の中に存在してゐたことの想定を必然とする。

3. ソークラテース、口添へしてシミアースに同意させ確認を取る――

イ、「学び知ること」が想起であるとシミアースが疑問に思ふ理由・・・シミアースは端的に疑問とするといふのではなく、親し

く自らが想起を体験したいのだと答へる。

ロ、「想起する」ことはそれ以前における知識の獲得を含蓄すること

ハ、我々の知ることが次の仕方では生ずればそれが想起であること、すなはち――

α 概念・・・感覚経験においてその感覚経験の対象を認識するのみならず、その対象以外の或る対象を心に思ひ浮かべたならば、それはその思ひ浮かべにおいてまさにその対象を想起してゐるのだ。(但し、感覚対象の知識と想起された対象の知識

とは別のそれである)

β 例示・・・人間の知識と豎琴のそれとは別であるが、恋する者らはその恋人の用ゐる豎琴を認めては恋人本人のなり形(エイドス)を思考のうちに捉へる。それが想起である。

γ 「想起すること」が特に言はれる場合のこと・・・想起されるものが長く忘却の中にあつた場合

ニ、「想起」の二つの類型

α 描かれた馬や豎琴等から人間を想起する場合(右のハのベータの例示に採用された知識二つの場合)

β 描かれたシミアースからシミアースその人自身を想起する場合(ここでは知識の数は言及されない)

第十九章 想起説とその含意する我々の魂の生前における彼のものの知識の獲得

1. 前章3のニの再確認のその β の場合(描かれたシミアースからシミアース本人を想起する場合)についての問題

イ、「想起」には類似したものから起る場合(前章3のニの β)と類似してはゐないものから起る場合(同じく α)とがあること

ロ、 β の場合に独特なこと・・・直接的になされてゐる感覚的経験の場の対象と想起された対象とは、一方では類似してはゐるものの、他方、前者はそのまま後者ではないと、かう人は考へるのだといふこと

2. 右の思考の場の分析を例示しながらで行ふ――

プラトン『パイドーン』篇内容梗概(水崎)

イ、感覺的な經驗の場で語られる諸々の等しいものどもその等しさから「等しさ」そのものが区別されて存在すること

ロ、我々は「等しさ」そのものをまさにそれとして知ってゐること

ハ、ロの知識の源泉・・・感覺的な經驗の場で等しいものどもを見てそれとは異なる「等しさ」そのものを思い浮かべるそこが源泉である。

ニ、我々が「等しさ」を問題にする二つの場所のこと——

α 感覺される等しさⅡ或る人には等しくあるが他の或る人には等しくはなくあるその限りでの等しさ例へば、木材同士が石同士が同じものなのに或いは等しく不等で人により見られるそのやうな等しさ

β まさに等しいと語られるものどもは不等としては現れないし、「等しさ」が不等とも現れない。

γ 右のαβからの結論・・・等しいものどもと等しいものどもとは同一ではない。

ホ、それらの相違にも拘らず、感覺の場の等しさは彼の等しさそのものを思い浮かべさせた。

へ、ホの状況で何を問題にすべきか——

α 二つの等しさについてその類似は如何の問題もあらうが、今は問はないこと

β 感覺の場の対象經驗が他のものを思ひ浮かべさせるその限り、その間の類似如何に拘らず、そこには想起があることは確認すべきである。

ト、想起の場において必然的な思ひについて——

α 感覺的な諸々の対象の等しさは等しさそのものそれと同程度ではなく、否、前者は後者には及ばぬのだといふ思ひ

β 右のαにおける前者の後者に対する見劣りの思ひは我々が後者を見劣りを思はせるだけの標準として以前に何処かで知つてゐたことを必然的にする。例示されてゐる等しいものどもと等しさについても事情は同じであり、我々は見劣りを思ふその以前に等しさそのものを知つてゐたのである。

γ だがしかし、逆に、感覺的な経験こそは彼のものの想起の源泉にして見劣りの思ひをもたらすものである。

δ とは言へまたそのやうな感覺的な事実もそれが「彼のものへの廻り」を必然的に持つものである限り、それに先立つ彼のものの知識の獲得を必然化する。

3. 右の先立ちの時の問題――

イ、我々の生誕は即感覺的な経験の開始である。

ロ、彼のものの知識の獲得はそれに先立つべきであつた。

ハ、故に、彼のものの知識の獲得は生前である。

第二十章 我々の魂の生前における知識の獲得とその携への実行と喪失、及び想起による回復

1. 生前における彼のものの知識の獲得とその知識の携へのあり方に関して

イ、第一の知識を所持したまま我々が生まれて来る場合・・・知識を所持して忘却はせぬ限りは、生前にも誕生後にも我々は知つてをった。

ロ、その知識は等しさ・大・小・美しきもの・善きもの・正しいもの・敬虔なもの、問ひにおいてもそれを問ひ答へにおいてもそれをこそ答へて「まさにそれであるところのもの」といふ刻印を押すものである。

ハ、第二の生まれて来る時に生前に獲得した知識を喪失し、誕生後に感覚の使用を通じて喪失した彼のものの知識を回復するといふ場合、ここでは我々の学び知ることはまさに想起である。

ニ、右のイとハとの再確認・・・彼の知識を知ってゐる状態で生まれ、そして生涯に渡ってその知識を持ち続けるか、知識を我々の誕生の時に喪失し、その後想起によって回復して学び知るかの二つのあり方

第二十一章 我々の前世で獲得した知識の携へはどう帰結してゐるか。想起の線のみたること

1. ソークラテース、前章での彼のものの知識の携への二つのあり方の何れが我々の実情なのかをシミアースに問ふ。シミアース、即答の不可能を告白する。

2. ソークラテース、シミアースの回答の助けにと「知ってゐること」とはその知る当の事柄について語り（ロゴス）を与へることが出来ることであることを同意させ、これが万人のよくすることであるかどうかを問ふ。

3. シミアース、否定的に回答する。

4. ソークラテース、その否定的な回答の含意を「知ってゐるあり方にあること」の否定として解釈し、故に、人は知識については想起するあり方にあるのだと導く。

5. ソークラテース、なほその結論の含意するところを知識の獲得の時が問はれるものとして考へさせ、その時をイ、人間としての誕生後ではないと否定する。

ロ、故に、生前だと示唆する。

ハ、シミアース、その示唆をまさに誕生のその時だとして退けようとするが、ソークラテース、想起の前提である獲得した知識の喪失もそこでこそ語られるのであれば、それは端的な獲得の時にはあらずとする。

第二十二章 前世における『あり』（ウーシアー）の存在と我々の魂の存在との同等の必然性

1. ソークラテース、当面の議論の総合された結論を語る・・・もし我々が、一つ、何か美なるもの・善なるもの・さうした『あり』があるとすると、二つ、それら『あり』へとそれを以前から我々自身のものであったと発見しながら感覚で捉へられたすべてのものを淵源させるのだとする、三つ、感覚されるものどもをその『あり』の似像として見るのだとするといふ三つのあり方をするとすれば、そのあり方は『あり』の存在の必然と同様に我々の魂の存在の必然をも物語るものであらう、と。両者はともにあるかともにあらざるかである。

2. シミアースの受け答へ

イ、同一の必然性といふ議論の好都合のこと

ロ、イの理由づけ・・・美や善こそ取り分けて最高度に「ある」のだといふ以上には何ものも明々白々であることはない。

3. ケベースの反応・・・シミアースがケベースに代って答へ、議論の徒たる彼にも十分であるはずとする。

第二十三章 魂の我々の死後の存在は未証明ではないかとの疑問と形式的な回答

1. シミアース、魂の死後の存在は未だ語られてはゐないことを持ち出す。魂の生前の存在もこの世での魂の身体からの離脱においてそれが滅ぶことを妨げない。

2. ケベース、生前の魂の存在証明は求められるべき論証のそのただ半分だけを論証したのに過ぎない。魂の我々の死後における存在は未証明である。

3. ソークラテース、形式的にはすでに論証はなされてゐるのだともする。すなはち、想起説と生成消滅の円環の説を結びつければ、この世への誕生を待つ生前の魂は再び生まれて来べきものである以上は死後にも存在しなければならぬから。

第二十四章 死の恐怖を追ひ遣るべき呪ひ歌の探し求めの必要

1. ソークラテース、死の恐怖とは形式的な証明だけではそれに対抗するには不足するものだとし、死を恐怖する我々の中の子供への呪ひの歌の必要を言ふ。
2. 加へてソークラテース、呪ひ師の探し求めの努力の必要を説く

3. ケベース、議論の中断地点への復帰を提唱する。対するソークラテースの同意

第二十五章 存在の二系列・・・合成的・変容的・感覚的と非合成的・同一的・思考の推理的

1. ソークラテース、問ひを設定する――

イ、散り散りになるといふ受動(パトス)は何に相応しいか。

ロ、何のためにこそ恐れるのが相応しいか。

ハ、魂は右の二つの問ひに関して如何に回答さるべきものであるか。

2. 合成的なものと非合成的なものについて言へば、前者は合成のまさにその仕方で分解され、後者は分解されないのだといふことの確認

3. 常に同一性においてあり同一のあり方を保つものは非合成的、その点で否定的なものは合成的であること

4. 彼の「あり」と感覚物、例へば「美そのもの」と多くの感覚される美しいものどもとでは、彼の「あり」は同一性を持つもの、後者は変容するものである。

5. 変容するものと同一性を保つものとをそれぞれ扱ふもの――

イ、変容するものは諸々の感覚が

ロ、同一性を保つものは思考の持つ推理のはたらきが

プラトン『パイドーン』篇内容梗概(水崎)

第二十六章 「あるものども」の「見られるもの」と「見えぬもの」への二分と肉体と魂

1. 前章5の再確認・・・「ある」とされるものどもの二つの形

イ、それらは「見られるもの」と「見えぬもの」とである。

ロ、「見えぬもの」は常に同一性においてあり、「見られるもの」は決して同一性を保たない。

2. 人間の持つものを右の線で考へる――

イ、人間には肉体と魂とがある。

ロ、肉体は「見られるもの」に類似しかつ同族である。

ハ、魂は人間の自然本性にとっては見えるものではない。

ニ、「見えぬもの」には魂の方が類似してゐる。

第二十七章 「あるものども」の二つの取り扱ひと魂がそれにこそ親しいもの

1. 我々の「あるものども」の取り扱ひの二つのあり方――

イ、視覚・聴覚・その他の感覚を通じてその考察に肉体を用ゐる場合には、その考察はそれと同族の片時も同一性を保つことのないものの方へと引きずられ、魂そのものも彷徨し混乱し幻惑させられる。

ロ、魂が魂自身で考察する時には、魂は彼処へと純粹で永劫、不死不変なるものの方へと赴き、その存在との同族性のままに自らへと帰り、常に彼のものとともにあり続ける。そして魂はその彷徨を止み彼のものと関りつつ同一性においてある不変のものとなる。

2. 再確認・・・魂は「あるものども」の何れに類似し親近であるか。同一のあり方を常に保つものところ。

第二十八章 承前——「あるものども」の二分と魂・肉体が各々類似するもの

1. 肉体と魂との共同において支配と隷屬とに關して自然本性が命じてゐることからする考察——

イ、肉体には隷屬することを、魂には支配することを命じてゐる。

ロ、神的なものは支配し主導することがその本性であり、死すべきものは隷屬がその本性である。

ハ、それ故、魂こそが神的なものに似てゐる。

2. 以上すべてからの帰結——

イ、一方に、神的であり不死であり知性のみが關るもの、一なる形のみを持ち分解されず常に恒常的で自己同一を保つものが存在し、魂はかかるものにこそ最も類似する。

ロ、他方に、人間的でしかないもの、死すべきもの、一なる形を持ち得ないもの、知性の関りのないもの、分解され片時も同一を保たぬものが存在し、肉体がそれに最も類似する。

第二十九章 我々の死後、魂は雲散霧消しはせぬかと恐れてゐたシミアースの恐れに回答する。

1. 前章での議論の帰結の確認を基にして死後の我々の魂の雲散霧消を恐れてゐたシミアースの恐れに回答をする――

イ、分解されるのは肉体のことである。

ロ、魂には分解を受け付けぬものであるか或いは何かそれに近いあり方こそが相応しい。

2. 我々の死後の肉体・魂のあり方を肉体のあり方を先づ見た後に魂のそれに及ぼすといふ仕方で語る――

イ、死後、可視的な肉体は可視的な領域に死体としてあり、何れは分解し消失するとは言へ、時としてその或る部分は不死とも

言ふべき長期間に渡って残存する。

ロ、不可視的な魂が自らと類似する高貴・純粹・不可視の領域へと至るべきものが我々の死後ただちに雲散霧消することなどは

考へられない。むしろ、自らに凝集し純粹なものとなった魂は彼処へとただ立ち去り行きそこで至福なものとなるのみである。

第三十章 不浄な魂の物的なものに囚はれ続けるその終始のこと

1. 不浄な魂、真実なものとは感覚的なもの・飲食の具に供し得るもの・性的な快楽に用ゐるものつまり物的なものだけだと思ひ、知性の関るもの、知慧を愛する営みが把握するものはこれを嫌悪する魂は、物的なものに取り付かれ、それがそのともばえともなつてゐる。

2. その結果――

イ、物的なものを帯びた魂はその軽やかさを失ひハデースを恐れ可視的な領域へと引き戻され、碑や墓のまほりを転々とし、可視的なものを与り持って幻影として見られる。

ロ、そのような魂はその彷徨ひの果てにそれに付き纏ふ物的な欲望から再び肉体の中へ繋がれる。

第三十一章 不浄な魂の繋がれる先のそれぞれについて

1. 生涯の習ひに応じたエートス（性状・さが）へと不浄な魂は繋がれるのだといふ総論

2. その各論――

イ、大食・恣意・暴飲などを慎まず常の習ひとした者らは驢馬などの獣の種族へ

ロ、不正・専制・掠奪を何よりも好んだ者らは狼・鷹・鳶の種族へ

ハ、公共の市民としての徳である習慣と習熟だけで身につく正義や節制を修めた者らは馴化された種族たる蜜蜂・雀蜂・蟻などの種族へ（但し、この徳には哲学と知性とは関りを持たない）、そして人間の種族へもう一度繋がれる可能性もある。

第三十二章 神々の一族へと至るといふ智慧に親しむ者の定めのこと

1. 神々の一族に至る定めはただ智慧に親しむ営みに徹して一点の曇りなく清浄となりこの世を立ち去る者、学びにひたすらな者のものである。

2. 真正の仕方を知を求めざる者の肉体的な欲望に対して堅く己を持し自らをそれに委ねない理由——

イ、まさに右の定めのごとくである。

ロ、愛財家が破産や貧困を恐れ権力欲や名誉欲の徒が不名誉や悪評を恐れて欲望を遠ざけるのではない。

3. その生が自己自身の魂への関心へとこそ捧げられて肉体を形作る営みへとは向けられてはゐない人々は、世間の人々とは決別し彼らとは同道せず、哲学の道標にこそ従って行く。

第三十三章 智慧に親しむ営みの道標のあり方

1. 智慧に親しむ営みに入った者の最初の観察——

イ、魂がまさに肉体といふ囲ひからしか「あるものども」を考察出来ず魂の魂としての考察の不可能を強ひられてゐることの看取

ロ、肉体といふ牢獄の巧妙の喝破・・・牢獄に囚はれてゐる者自身がその欲望によってその囚はれに協力をしてゐることの見抜き

2. 智慧に親しむ営みの次いでするかかる魂を引き取っての激励とその解放——

イ、視覚・聴覚による考察の欺きの指摘、不可避の場合を除いてのそれら感覚からの遠ざかりと魂自身への凝集の勧告

ロ、存在するものそのもののその「あり」の魂による直知は魂の自らへの信以外にはあり得ないこと、感覚を通じて感覚的な浮動においてあるものを考察する場合には何らの真実も見出されはしないことの教へ、すなはち、浮動するものは感覚的にして可視的なものだが、魂が自ら見ることは知性の対象にして不可視のものだとする。

3. かくて真実に知を求める者の魂は自己自身の魂の解放の道行きに反応することはなく、そして思ふ——

イ、強烈な快楽・恐怖・欲望の感覚からの害悪は最大かつ究極的であると思ふ。

ロ、何故に害悪として最大かつ究極的であるか・・・さうした感覚こそは明々白白で真実極りなしとする故

4. 3のロのあり方が魂の肉体への究極の呪縛であること

イ、快楽や苦痛は一つ一つ魂を肉体へと打ちつける鋌を持ち魂は肉体化して、肉体の肯定するものを真実となすやうになる。

ロ、その結果・・・肉体と思ひを同じくし肉体と同じものを喜ぶことからしては魂そのものの性向も養ひも肉体と同様となり、清浄なままにハデースへ至ることなく肉体に汚穢されたままこの世を立ち去る。その結果はまた別の肉体の中に墜ち其処に種蒔かれ根を張り、神的で清浄で一なる形のものとの共存するその与りを喪失する。

第三十四章 真実に学を好むものの努力

1. 以上によってこそその正当にも学を好む者の慎みと勇氣なのだといふことの確認

2. またその者は、解放は哲学の仕事であり自分はその身を快樂や苦痛に委ねてペーネロペイヤーの際限なき機織をすることなどは決してしない。

3. 否、彼は努める、諸々の快樂や苦痛には風を与へ思惟の働きに従ひその中にありつつ、真実で神的なものを、すなはち、思ひなしによっては把握され得ぬものを觀照し、ただそのものによって養はれ、生ある間はかくして生き、死せる後は自らと同族の神的なものへと至り、人間的な諸悪から離脱し終はることに。

4. 魂がそのやうな養ひの中にあつては、人の死においてそれが雲散霧消する恐れはない。

第三十五章 反論の勧めと今を不幸とは思はぬ白鳥の予知の歌にも同じソークラテースの予知

1. 生じた沈黙とソークラテース、シミアースとケベースの様子

イ、ソークラテースは語られたことに思ひを潜めてゐた。

ロ、シミアースとケベースとは互ひに密かに語り合つてゐた。

2. ソークラテースの二人への質問の勧め――

イ、これまでの議論に不十分なところがあるのかどうか。きっとあるに相違ない。

ロ、行き詰まりがありそれを自分らでよりよく語る見込みがあればさうすべきこと、ソークラテースとともにそこに向まくやれるやうであれば、ソークラテースを呼ぶべきこと

3. 対するシミアースの返事・・・シミアースとケベースとは各々行き詰まりを感じるところを持ってめつつ互ひに質問しろと言ひ合つてゐたこと、だがそれはソークラテースの今の不幸にとつては躊躇すべきことと思はれてゐたこと

4. ソークラテース、それに返して――

イ、今の事態を不幸だとは思つてゐないことをシミアースとケベースとにさへ納得させてはゐないとすれば、まして余人にはさうすることは不可能であること

ロ、ソークラテースの予知と予言の術が白鳥にも劣ると二人に思はれてゐるだらうこと

ハ、白鳥の死期の感知について

α 白鳥は平常にも歌ふが今はの際には取り分けて激しく際立って美しく歌ふ。

β それは自らの仕へる神アポロン御許へとこの世を去る悦びの故にである。

γ 人間はその死への恐怖から白鳥も死を嘆き苦痛の余りに激しく歌ふのだと虚言してゐる。

δ 鳥といふ者は寒さやその他の苦痛を感じてでは歌ふことはない。伝説上さうして嘆き悲しんで歌つたとされる夜鶯や燕やつがしらも同様である。

ε 白鳥はアポロン神の属するのであれば予言の力を持ち、死期においてハデースでの善きことどもを予知して喜びの歌を歌ふのである。

ニ、白鳥とソークラテース自らが同類であること

α とともに同じ神アポロンに仕へる聖なる僕であること

β 主から同じ予言の術を授かつてゐること

γ この世の立ち去りにおいて同じやうに暗澹たる気持ちなどではないこと

ホ、右の故にシミアース・ケベースは何の遠慮をすることもなく語りかつ問ふべきこと

5. シミアース、その行き詰まりを開陳するに当たり、その総じての心掛けを述べる――

イ、およそ魂の死後の存在などといった問題に関してこの現在の生のうちに明確な知を得ることは、不可能ないし全くの難事であると思ふこと

ロ、だが人は八方手を尽くして様々の言説を吟味すべきであり、すべてを尽くして疲労困憊してこそ初めて問題も放棄されてよいのである。さうせぬ者は柔弱の徒である。

ハ、人がそれを取り貫徹すべき方途の二つ――

α 事柄の真実を人から学ぶ或いは自分自身で発見する。

β 人間的言論の最上かつ最も論駁し難いものを取り、恰も筏に身を委ねる如くそれに身を託して、常に危険を冒しつつこの生を渡り切る。

6. その心掛けから質問して質問しなかったことを後悔しない意志の表明

第三十六章 「魂 \parallel ハルモニアー」説の提出による魂の死後の存在への疑問

1. ソークラテース、前章末のシミアースの議論の不足の感覚を受けてその問ふことを誘ふ。
2. シミアースの疑問の吐露――

イ、魂と肉体との関係をハルモニアー（調律された調べ・調和）と堅琴。弦とのそれとして比喩しての議論であること
ロ、ハルモニアーは見えざるもの・非物理的なもの・美しく神的なもの、堅琴と弦とは物体にして物的なもの・合成物・土の性を持つもの・死すべきものと同族のものだと確かに言ふことが出来る。

ハ、肉体からの魂の離脱しながら、堅琴を壊し弦を切断して堅琴とハルモニアーとの繋がりを切って考へる。

α ソークラテースが魂の死後の存在を主張するやうに、ハルモニアーもまた堅琴の破壊後にもなほ存在するのだとの主張を想定する。

β その主張の理由たるもの……堅琴の破壊後にも堅琴と弦とは死すべき土の性のものでありながらもなほ残存してをれば、まして神的で不死なるものと同族のものは先には滅ぶことはないのだから。

- γ αの主張の再強調……ハルモニアーは依然として何処かに存在し、そのパトス（受動）以前に堅琴の方が滅ぶのだ。
3. 右の比喩を断固として「魂 \parallel ハルモニアー」説として仕立てて論議するシミアース

イ、肉体は熱と冷、乾と湿、その他の反対的な性質が作り出す一種の緊張関係からなり、その結合によつた統一体であり、統一される諸要素が互ひに適切な比でもって和合ないし調和すれば、そこに魂が存在するのである。

ロ、それ故、その調和の比が病ひその他でもって度外れに弛緩・緊張すれば、魂はよしそれが神的ではあるとしても、ただちに滅ぶのである。

ハ、類例・・・楽音のハルモニア、技芸家の作品の調和

ニ、ロに反して物体の残骸はなほ残存する。

4. 右の論議はハルモニアとして考へられる魂は死に際して真っ先に滅ぶことを示すことの宣言

第三十七章 ケベースの疑問——人間と衣服の比喩

1. ソークラテース、シミアースの論議に一目を置き人々にその論議への回答を促しつつ、ケベースの疑問を聞いて同意或いは反論するつもりだと、その手立てを言ふ。

2. ケベースの疑問

イ、議論はなほ同じところに留まり、魂の生前の存在は見事に論証されたがその死後の存在はなほ未証明である。

ロ、但し、ケベースは魂が肉よりも永続的ではないとするシミアースには与しはせず、魂の肉体に対する優越はこれを思ふのだとする。

ハ、ロの立場からはより弱い肉体の存在を見る以上はより強い魂の残存は必然だともされようが、それでもなほ魂の死後の存在を危ぶむ理由は何であるか、その理由を語る意志の表明

ニ、魂の死後の存在の主張を比喩して語るなら、機織師が死んだ時に機織師は死んではゐない、その証拠はその織り着用してゐた衣服の残存だとする。何故なら、人間と衣服とではどちらがより長期に渡り存続するかと問へばそれは人間の方こそだから、と。

ホ、だがしかし、それでも、成程、より長期的な人間とより短期的な衣服とではさうした人間がそのやうな衣服を数多く着潰すといふことがあり得ても、最後に着てゐる衣服と人間とについて見れば、人間はその時着てゐる衣服よりは先に滅ぶのだといふべきであらう。

へ、「人間対衣服」の比喩は「魂対肉体」の関係のそれであり、魂は生前に如何に多くの肉体を着古すことがあるのだとしても、しかし最後の肉体と魂との関係においては、ここでは魂こそが先に滅び肉体はなほ残存するとしなければならぬ。そしてやがてそれも腐敗し消滅する。

ト、死後の魂の存在といふことには我々は安んずることは出来ないといふことについての全般的な理由づけ——魂の強韌を最大に許容して生死の輪廻を何度も繰り返すとしても、その輪廻生成の反復の中で疲労し遂には或る死に際して滅ぶのではないか、但しその滅びの死の時は何人にも感知され得ぬのだから。それ故、魂の全き仕方での不死と不滅との論証が必要である。

第三十八章 疑問が提出されての一同の気持ちとソークラテースの姿

1. 二人の疑問提出を聞いてのその場にゐた人の陥った気持ちのこと

プラトン 『パイドーン』 篇内容梗概 (水崎)

イ、全員、一様に不快感の中へ

ロ、その理由……以前の議論にすっかり納得してゐたのに二人の疑問によってすっかり混乱しこれからの議論までもが疑はしく思はれ、自分たちが議論の判定者たり得るか、事柄自身が疑はしいかと感ったこと

2. エケラテースのバイドーンの言葉を聞いての感想と要求――

イ、自分にも如何なる議論に信を置くべきかの疑念が生じたこと

ロ、「魂ハルモニアー」説の魅力のこと

ハ、ソークラテースのその後のすべてを語るべき要求

3. バイドーンの答へ……ソークラテースのその時の姿への感嘆――

イ、答へに窮しなかつたと言ふことへの感嘆ではないこと

ロ、若者の論議への好意と賞讃

ハ、若者の議論から受けたバイドーンらの心の情態の感知とその治癒と議論の考察への呼び戻し

ニ、その実際――

α バイドーンの髪を掴んで、髪を明日ではなく、もし議論を救ふことが出来なければ今日この日にも髪を切ることになることをソークラテースは言ったこと

β バイドーンがシミアースとケベースの二人を一緒に相手にするのはヘーラクレスにも出来なかつたことだと言ってソークラテースから彼をイオラオスに見立てて呼ぶやうに言はれ、バイドーンは自分がイオラオスでソークラテースがヘーラク

レースなのだ」と訂正したこと

第三十九章 言論嫌ひを用心すべきだとのソークラテースの論し

1. ソークラテース、我々がそれを蒙るのを用心すべき或る情態（パトス）のあることを言ふ。

2. 次いでソークラテース、それはどんな情態なのかとの問ひに答へてそれを「言論嫌ひ」といふ最大の悪だとする。

3. そしてその「言論嫌ひ」を「人間嫌ひ」と同じ我々の歩みから生ずるもののだとし、後者の仔細を語る、すなはち、「人間嫌ひ」の発生の経過は――

イ、最初に我々が人間を取り扱ふ心得を持たずに或る人間をすっかり信用してその人を全く偽りのない健全で信頼に足る人間だと思ふ。

ロ、やがてその人間を邪で信頼出来ぬ人間だと思ひ知らされ、更にまた別の人間で同じ経験を繰り返す。

ハ、その苦い経験が度重なり取り分け自分に最も親しく最上の友だと信することも出来た人間からさうした経験をさせられると、そのやり場のない憤りの集積から万人を憎むやうになり、人間といふものにはどんな健全もないのだと信するに至る。

4. ソークラテースの「人間嫌ひ」の情態に対する批評――

イ、それは見苦しいこと

ロ、「人間嫌ひ」に陥った者は人間のことに於いてそれが如何にあるかの心得なく人間に対処しようとした。

ハ、心得あれば人間をそのままに考へ、全くの善人や全くの悪人は数が少なく大多数はその中間だとしたはずであること
 5. その含意するところ——

イ、人間であれ犬であれ。極端に大きいものや極端に小さいものは稀、同様に遅速・美醜・白黒についても両極端は稀少、中間が多数であるといふやうなことである。

ロ、それ故、邪悪な者の等級を決める競技では一等賞はごく少数である。

6. 言論の場合と人間の場合とはその点では似てはあらず、むしろ次の点でこそ似ること——

イ、言論の心得なしに或る言論を真実だと思ひ込み、やがてその言論を偽りだと思ふやうになる。

ロ、別の言論でも同じ経験を^{する}。そしてな^{かん}づく矛盾対立論法（アンティロギコイ・ロゴイ）をこととする者は物事とか言論は何一つ健全で確かなものはないと見抜いたつもりになる。曰く、すべてあるものどもはエウリポスの潮流さながらに不動するのみだ、と。

7. ソークラテースの「言論嫌ひ」への批評——

イ、その心の情態は憐れむべきである。

ロ、その情態とは、真実で確かな言論が何かあり、それは洞察することが出来るものであるのに、矛盾対立論法の同じものでありながら真実とも虚偽とも見えるそれに出会って、その混迷の原因を自らの心得のなさに帰すことをせず、責任を言論の方に帰していい気になってゐるといふことである。

ハ、その結果、言論を憎み罵りつつ以後の生を送り、「あるもの」の真実とその知識に与り得ぬ者となる。

第四十章 ソークラテース、これからの議論のためを思つて弁ずる。

1. ソークラテース、前章の言葉の上に立ち、およそ言論には何一つ健全なものはないといふ思ひを魂に忍び込ませぬ用心と自らの健やかさを求める努力の必要とを言ふ。

2. 右の用心がそのためとするところ――

イ、パイドーンその他の人々にはこれからの全生涯のため

ロ、ソークラテースにとってはまさにその死のため

3. 右のロの理由

イ、自分の死の問題に取り組む態度は智慧に親しむ者のそれではなくただ争論に勝つことのみかも知れないから。

ロ、学びに無関係な連中は論議されてゐる事柄が如何にあるかを考慮するよりは、その主張のその場にゐる人々の受容のみに熱中する。

ハ、学びに無関係な連中とソークラテースとの相違――自分は自分の主張が真実であるところの場の人たちが思つてくれることに努力をするのではなく、それはそれが叶つてもただ付随的にだけであつた、他ならぬ自分自身にとってさう思はれることにこそ努力するのであること

4. 3のハにおけるソークラテースの計算――

イ、魂の不死といふ主張がもし真実であれば、その確信は善きものである。

ロ、例へその主張が真実ではなく死後は無であるとしても、その確信のお陰で死の前に嘆いて人々を不愉快にはさせないのだ。
ハ、その主張が真実ではなく愚かな確信に過ぎぬとしても、それは死とともに無に帰し禍ひではなくなる。

5. ソークラテース、シミアースとケベースとに告げる――

イ、自らは以上の心積もりで議論へと向かふこと

ロ、二人はソークラテースのことを考慮するのではなく、むしろ真理の方をこそ心に掛けて同意反対をなすべきこと

ハ、ソークラテースが熱心さの余りにソークラテース自身をもシミアース・ケベースをも欺き通して、蜂のやうに針を残して立ち去ることのないよう、注意を喚起する。

第四十一章 二人の疑問点の再確認と「想起説」を採るシミアースの「魂 \parallel 調和」の撤回

1. ソークラテース、シミアースとケベースの疑問の要点を再確認する――

イ、シミアースの疑問・・・よし魂は肉体よりもより神的でより価値が高からうともそれがハルモニアーである限りはそれは肉体よりも先に滅んでしまふはずである。

ロ、ケベースの疑問・・・よし魂は肉体よりもより長期間存続するものであらうとも、その先は不明である。すなはち、魂は幾度も数多くの肉体を着潰すのだとしても最後の肉体はこれを後に残して自らはその先に滅んでしまふのではないか。

2. 二人の同意

3. ソークラテース、これまでの議論に関し二人が全面否定であるか部分肯定・部分否定であるかを問ひ二人が答へは後者だとするのに、「想起説」に関する評価を問ふ。
4. 二人、全面的なその説への賛同を答へる。
5. ソークラテース、シミアースの賛同は撤回することが必至であることを示して行く――
イ、「ハルモニアー」を多なる諸要素の緊張からの合成だとしたシミアースの考へを復唱する。
ロ、「ハルモニアー」のその本質からすれば、合成からの結果であるハルモニアーが合成するその諸要素の存在以前に存在することとは不可能であることを指摘する。
- ハ、シミアースの主張は一方で「想起説」に賛同するとする限り魂の前世での先行する存在を承認し、他方「魂Ⅱハルモニアー」説によって先行存在を否定する。すなはち、肯定し否定する矛盾を犯してゐる。
6. ソークラテース、シミアースのディレンマについてそのどちらを採るかを迫る。
7. シミアース、答へてそれは断固として「想起説」をこそだとする。
- イ、「魂Ⅱハルモニアー」説は尤もらしさと見かけのよさによるだけで、論証されたものではない。これは詐欺師の議論であり欺くものである。
- ロ、「想起説」は「あり」（ウーシアー）は本来的に我々の所有だと基礎定立を通じて論証されたものだ。

1. ソークラテース、「魂」ハルモニアー」説の本質をなすその構成諸要素と構成結果たるハルモニアーとのあり方を、順次確認する――

イ、構成結果のあり方と構成する諸要素のあり方とは同一平面上のそれである。

ロ、構成結果とはそもそもその構成における能動・受動のその謂ひであるが、その能動・受動はまさに構成諸要素こそそのそれである。

ハ、それ故、ハルモニアーは構成諸要素の能動・受動に従ってこそそのそれであり、それを導くものではない。

ニ、ハルモニアーはその構成諸要素に反対の動を動くものではない。(同意事項のA)

2. 「ハルモニアー」をその構成諸要素から、それであるとすべき観点を捨象し、「構成するそのこと」からこそ見る方向へ

イ、「如何に調律するか」でハルモニアーの本来のあり方がある。

ロ、もしその調律に程度の差があるのだと仮定すれば、その結果のハルモニアーにもそれに応じて差があることにもなる。(同意

事項BのI)

ハ、右のロははたして「魂」のことであるかの問い、その否定の答へ(BのII)

3. 右の二つの同意事項(BのIとBのII)を用ゐ、帰謬法による議論を行ふ――

イ、「魂」について我々は善きそれ悪しきそれを云々すること

ロ、「魂Ⅱハルモニアー」説の論者の右の事実に対する解釈は「善き魂はもとより調和である自分のうちに更にもう一つの調和を持ち、悪しき魂はそれとし不調和である、もう一つの調和を持ってはゐない」ともならうこと

ハ、同意事項BのⅡに拠れば魂が魂であることには程度の差はない。それ故、「魂Ⅱハルモニアー」であるとすればそのハルモニアーとしての差もまたあり得ない。

ニ、ハの含意・・・魂の魂たるべき調律も一定である。

ホ、ニの含意・・・魂のハルモニアーへの与りも一定であり、魂相互の間にその相違は存在しない。

ヘ、魂は魂としてあれば他の魂よりも強く或いは弱く魂なのだといふその差異はないからして、その調律もまた一定であった。

ト、への含意・・・魂は他のそれより多く不調和に或いはより多く調和に与るといふこともない。

チ、右のトにおいて「悪徳Ⅱ不調和」「徳Ⅱ調和」とすれば、魂の「徳」或いは「悪徳」への与りの差はない。

リ、全き調和は不調和ではないのだからして、およそ不調和たる悪徳には調和たる魂は与らない。

ヌ、結論・・・およそ魂にはそれが魂であることの差異は相互には存在せぬのであれば、魂は善き魂である。

4. 当面の議論の総括・・・右の帰結は承服さるべくもないそれであるからには、「魂Ⅱハルモニアー」説は退けられるべし。

第四十三章 魂・その支配し指導し統御し肉体の諸情態に反対するもの

1. 「ハルモニアーはその構成諸要素の動に反対し得ぬ」とする「魂Ⅱハルモニアー」説の同意事項の検討へ

プラトン『パイドーン』篇内容梗概（水崎）

一九五

イ、人間の中の支配的なものは思慮ある魂である。

ロ、その魂の支配とは肉体的な諸情態への同調か反対か。我々は渴ゑても飲まず飢ゑても飲まぬことをする。

ハ、だが、先に「魂Ⅱハルモニアー」説ではハルモニアーはその構成諸要素の動に反対し得ぬとされてゐた。

ニ、ロを再度強調して再確認する・・・魂はそれを構成する肉体的な諸情態のすべての上に立ち、それらを導き反対し統御してゐる。体育術・医術の手荒い或いは穏やかな懲らしめ、威嚇や説諭、ここでは魂は別の他者に対する如く諸々の欲望・怒り・恐怖に対して語りかけてゐる。

2. ホメーロス『オデュッセイアー』における「魂Ⅱ指導者・統御者」説、すなはち、「魂Ⅱ調和」説の忌避

3. この章の結論・・・「魂Ⅱハルモニアー」説の拒否、何故なら、ホメーロスや我々自身が同意しないから。

第四十四章 ケベースの問題の核心を確かめる。

1. ソークラテース、問答の目下の状況をテーバイの人シミアースの奉ずる「魂Ⅱハルモニアー」説に所縁を持つ女神ハルモニアーがその気色を和らげ、今やその父君たるカドモスの気色を和らげるべくケベースの説に向かふ時であるとす。

2. ケベース、それに答へて、シミアースの応ずるに困難と思はれた疑問もソークラテースは一撃の下に潰えさせたのであれば、自分の疑問もまたさうなるは必至かと言ふ。

3. ソークラテース、右のケベースの言葉にそれは広言に過ぎる、言論の行方は神の配慮なさることだとして事柄そのものへと肉

迫すべきことを言ふ。

4. 次いでソークラテース、ケベースの議論をまたあらためて確認する――

イ、ケベースは魂の不滅と不死との証明を要求してゐる。何故なら、それこそが智慧に親しむ人間が死をも恐れずまた彼処の生の至福を信ずる条件であるからとしてゐること

ロ、魂の強韌と神的なあり方、そしてその生前の存在、これらすべての主張も魂の不死を明らかにしてはゐない。示されたのはただ魂の長期間の存続と経験の多量のみ。

ハ、否、魂の受肉はむしろ魂の滅亡の始まりであり、遂には何時かの死に際し滅ぶことは何ら妨げられてはゐない。

ニ、そもそもハこそが基本の状況であれば、死の恐れは不可避といふこそが揺ぎない事実であり、その事実の前では魂の受肉の回数は問題とはならない。すなはち――

ホ、問題の核心はまさに魂の不死といふこととその理由なのである。

5. 右のケベースの問題の再確認は問題そのものの核心を取り逃がさぬためであること

第四十五章 「生成消滅一般」の原因の探求の必要とソークラテースの経験

1. ソークラテース、ケベースの問題をものの生成消滅ことについて全体的に問ひその原因・根拠を徹底的に究めるべきそれだと批評する。

2. 次いでソークラテース、この点での自らの経験の披露の意図を示す。

3. 「生成消滅の原因探求」の披露（その一）——

イ、その若年における『自然についての探求』なる知識の追求への熱中

ロ、熱中の理由・・・各々の原因・根拠を知ることの並外れた知識であることへの感嘆

ハ、その検討した問題の披露——

α 生物の形成は如何？ 熱と冷との或る種の腐敗への与りか？

β 我々に思考させるものは？ 血液か？ 気とか火とかであるか？、頭脳こそが聴覚・視覚・臭覚等の感覚をもたらし、それら感覚から記憶と思ひなが生じ、それらが定着すれば知識が生成するのか。

γ それらのものの消滅、天空や大地の諸現象の考察

4. 「生成消滅の原因探求」の経験の披露（その二）——

イ、その種の研究へ自らが生来不向きであるといふことの自覚への想ひ到り

ロ、その証拠たる経験——知っていると自他ともに思っていることもそれを見る力を奪はれた（！）ことであるが、先づはかう知ってゐるのだとしてゐた経験について

α 人の成長の原因・根拠の問題を先づ“飲食によって”と考へてゐた。

β 大きい人と小さい人とが並んで立つ時、大きい人は“頭一つ”で大きいのだと考へてゐた。

γ 十が八より多いとは“二の付加”であり、二尺が一尺よりも大きいとは前者が後者を“半分だけ超過してゐる”からだ

考へてゐた。

ハ、今は知つてゐるとはなし得ないのだといふその経験について

α 一に一を加へて二となつたといふその場合、それは別の一を加へられたその一であるのか、それとも加はつた一なのか。

或いは“付加”は本当に原因なのか。接近と近接とが二の原因と本当に言へるのか。

β 一の“分断”は二の原因なのか。それでは同じ二の接近と分離といふ反対のことが同じ原因とならう。

γ そもそも「一」の生成の原因とは何なのか。

δ 一般的に「そのものが生成消滅しまた存在する」といふことの原因の困難とその方途の放棄及び別の探求法の模索

第四十六章 アナクサゴラスの「知性(ヌース)」原因説へのソークラテースの大きな期待

1. 「ヌース」(知性)こそすべてを秩序づけすべての原因となつてゐるといふアナクサゴラスの教説への接触とその説への期待

2. その期待の実際――

イ、「ヌース」が秩序つけてをれば最善の仕方こそすべてに秩序を与へそこに置いてゐるはずであるから、生成消滅や存在の

原因の追求はあり方と能動・受動との最善のそれたるべしとの認識への到達。

ロ、右のイの認識から

α 「大地は平面であるかそれとも球状であるか」を原因と必然性との鑑みその善をこそ語るだらうと期待した。

プラトン『パイドーン』篇内容梗概(水崎)

一九九

β 太陽・月・その他の星辰、それらの相対的な運行速度、運行の持つ回帰点、その他の天体の諸現象に関しても同じ語り方の期待を持ったこと

γ 原因の与へ方は各々にとっての最高善と万有にとつての共通善の語りの期待

第四十七章 アナクサゴラースの「ヌース原因」説への失望とソークラテースの第二の航海法

1. アナクサゴラースの「ヌース原因」説の実際・・・実際には「ヌース」を何一つの原因として用ゐることなく、否、アエール（空気）やアイテール（純粹な大気）とか水を原因として持ち出してゐた。

2. 右のやうな実際の例示――

一方では「ソークラテースはそのすべての行為をヌースによって為してゐるのだ」とするが、他方では、例へばソークラテースが今此処牢獄のベッドの上に座つてゐることの原因を骨・腱・関節・肉・皮膚などの物理的な説明をもつて原因の語りに代へてしまふ。同様に、今に語り合つてゐることの原因も音声・空気・聴覚などの説明する説明が原因の説明なのだとする。

3. ソークラテースの思ふ原因の語り方――

例へばソークラテースが牢獄でベッドに座つてゐることの原因ならば、アテーナイ人たちがソークラテースの有罪判決をよしとしたこと、それ故にソークラテースもまた入獄をよしとしてアテーナイ人たちの命ずる刑罰に服することを正しいと判断したこととして、まさに原因を語ること

4. ソークラテースの原因のアナクサゴラス的原因に対する超越について……刑罰に服することを逃亡することや脱獄することよりも正しく美しいともし考へなかつたなら、最善といふことの思ひなしに導かれ、アナクサゴラス的原因それ自身がその場を失ふこととなるのだ。

5. 真実に原因であるものと補助原因たるべきものの区別――

イ、補助原因の認定……物理的な説明が与へられるものどもを「原因」と呼ぶのは奇妙である。それらはそれらなしには人がさうするがよいと思つたことをなし得ないといふ、その「必要条件」の意味での原因である。

ロ、補助原因の限界……物理的な説明が与へられる行為にとつての必要条件を通じ、ソークラテースはそのすることどもをしてをりそしてそれらをヌースでもつて行為してはゐるが、しかしそれは最善なるものの選択でもつてではないなどとするのは、投げ遣りの議論である。

ハ、投げ遣りの議論であるその理由……真の原因と必要条件との区別の無能力からの考へだから

6. 必要条件たる補助原因を真実の原因視して持ち出す諸々の例――

イ、大地の回りの渦動で大地を天空によって保持させる考へ

ロ、大地を平たい捏鉢となしそれを空気が底となつて支へてゐるのだとする考へ

ハ、真実の原因よりもなほ力強くなほ不死で万物を統括する働きにおいてもより優れたアトラースを発見し得ると信ずる考へ

7. ソークラテースの真実の原因の考へ方……万有はその最善のあり方でこそそのあり方を定められてゐる。

「善であるもの」(アガトン)「ねばならぬもの」(デオン)こそが万有を一つに縛りつけ、さうあるべく統括してゐるのだとす

る考へ

8. ソークラテースの苦境

イ、真実の原因を自分で発見することも人から学ぶことも叶はなかった。

ロ、原因の探求の第二の航海法を推し進める苦労を取った。

第四十八章 第二の航海法としての「ある」とされるものどもの真実の言論における考察

1. ソークラテースの覚悟或いは用心——

イ、日蝕の観察においては太陽の姿は水などに写してこそ見るべきでありさもないと眼を損ねるそのやうに、事物の考察も感覚でもって直接それに触れるべくこれを行へば魂は盲目にさせられるのだとの恐れ

ロ、太陽の姿を写す水の如く、事柄の姿を諸々の言論の中に写す着想

ハ、ロの比喩の拙さについて・・・水の中の太陽は確かに写像であり影であるが、言論の中の事柄は断じてさうした写像や影ではないのだといふ点で

2. 「ある」とされるものごとの真実を言論の中で考察する原因探求法（第二の航海法）の実際——

イ、何れの場合もその都度ソークラテースが最も強固だと判断した言論を基礎定立（前提）として置く。

ロ、その言論と一致する事柄は真と定め、然らざるものは真ではないと定める。

第四十九章 言論における「ある」とされることども真実の考察

1. 「言論」における「真実の考察」の詳論へ――

イ、基礎定立とは「何か美しいもの」がそれ自体でそのものとしてあり「善きもの」「大」その他すべてが然りであるとするとそのことである。

ロ、この基礎定立の承認から「原因」のあり方の発見も「魂の不死」の証明も期待されること

2. 基礎定立に続き――

イ、「美そのもの」の他に何か美しくあれば、それはそれが「美そのもの」を分有してゐればこそであり、そのことが原因である。
ロ、再度、右を強調し・・・賢しらな諸々の原因の語り――鮮明な色を持つ故に、形状の故に等々――は混乱させられるだけだからさうした原因論とは決別して、単純に、素朴に、そして愚直に「美しいものどもを美しくあらしめてゐるのはただ彼の美それ自体の現在・共有である、すなはち、美によって美しいものは美しい」とする。

ハ、同様に、大きいものが大きくありより大きいものがより大きくあるのも、それはただ大によってこそであり、より小さいものがより小さくあるのも小によってこそである。

3. より大、より小の原因を「頭一つだけでもって」とは言はず、右のハの語り方でもってこそ語ること

4. 3の立場を採る理由・・・「頭一つだけで」といふ「より大の」の原因論に対しては――

イ、「より大」も「より小」も「頭一つだけで」といふやうに同一のことを原因とするのかとの反論

ロ、頭は小さいものなのにより大きなものが大きくあることは奇怪ではないかとの反論

5. 同様に――

イ、十は八より二つだけのことでも多くありそれを原因として超過してゐるとするのを恐れ、多によってこそこそだとなすべきだともである。

ロ、二尺が一尺より大であるのはまさに大によってこそだとし、半分によってとはしない。

ハ、二の生成の原因を一と一との付加だとも、一の分断だとも言ひない。

6. 5のそれぞれの忌避とは、総じて真の原因論の立場では――

イ、何であれものにはそれが与り持つ各々に独自の「あり」があり、その「あり」の分有により各々は各々なのだ。

ロ、二の生成は二の分有でこそある。また一の生成は一の分有である。

ハ、分断や付加など賢しらな原因とは決別する。

7. 基礎定立そのものが問はれる場合――

イ、直ちに対応するには及ばず、先づは基礎定立からの帰結の相互の一致如何を検討する。

ロ、基礎定立そのものの論拠が求められるに至れば、更に上位の最上の基礎定立を定立する。

ハ、その上昇の過程はそれで十分な何かに達するのだと見込まれる。

ニ、出発点を論じつつ帰結をも同時に論じて議論をませこぜにすることはしない。

8. エケクラテース、シミアースとケベースとのソークラテースへの賛同をむべなるかなとし、その後の議論を期待する。

第五十章 反対関係にあるものそれ自体の反対の非受容と我々の中のその同様の非受容

1. 形相（エイドス）の存在とその分有といふことの同意の後のソークラテースの原因分析——

イ、「シミアースはソークラテースより大きくパイドーンよりは小さい」との語りはシミアースの中に「大」と「小」があるのだといふことである。

ロ、「シミアースはソークラテースを凌駕してゐる」といふその事柄の真相のこと……シミアースは彼がシ、ミ、ア、スであるといふそのことでもって本性上凌駕してゐるのではなくむしろたまたまその持つ至ったその「大」によってこそ凌駕してゐるのである。またソークラテースが凌駕されるのもソークラテースがソークラテースであるそのことによってではなく、むしろ彼がシミアースにおける「大」に対して「小」を持つに至ったからである。

ハ、パイドーンのシミアースに対する凌駕の場合もまた同様である。

ニ、右のイの語りの真相の分析……一方の「大」に対してはそれに凌駕さるべく「小」を差し出し、他方には「小」を凌駕するものとして「大」を提出してゐる。

2. 右の分析の場にあること——

イ、「大」そのものが大かつ小たるを決して望まぬことはむろんのこと、また「我々のうちにある大」も「小」を決して受け入れず、自らが凌駕されることも望まない。

ロ、「大」はそれにとつての反対たる「小」の迫りに対しては次のどちらかである——

プラトン『パイドーン』篇内容梗概（水崎）

α 或いはそれがそこにあつた場から立ち去るか

β 或いはその場で滅ぶか

ハ、「大」は踏みとどまって「大」でありながら「小」を受け入れて今までそれであつた「大」とは異なるものとなることはしない。
 い。

ニ、それがもし「大」ではなく「ソークラテース」であれば、「小」を受け入れてまさにソークラテースであり同一のものでありつつも「小」であることがあり得る。

ホ、総じて我々の中にある「大」も「小」も「小」や「大」をそれぞれ受け入れて自らと反対のものとなることを望まない。むしろ退去するかないし滅ぶかである。

第五十一章 「反対の事物」と「反対そのもの」との相違

1. 或る疑義の声・・・今の議論は「反対のものからの反対のもの生成」といふ先の議論と矛盾するのではないか？ 先には「大きなもの」は「小さなもの」から生じたその逆も真であるとされてゐた。

2. ソークラテース、答へて二つの議論の相違を説く・・・先の議論は「反対の事物の反対の事物からしての生成」を問題にし、目下の議論は「反対そのものの、それに対する反対の非受容」といふことを問題にしてゐるのであること、そしてそのことは「自然本性においての反対」であれ「我々の中にある反対」であれ、等しくさうなのだといふことの議論でもあつた。

3. 敷衍して・・・「反対」の性格を持つものと、「反対」といふ性格そのものとの相違、すなはち、「反対」の性格を持てばその持つ事物はその「反対」の性格の名前で呼ばれるのであり、そして「反対」といふ性格そのものは「反対である事物」のその呼び名を「反対」がその内にあることでもって与へるものである。この「事物のうちにある反対そのもの」もまた相互からの生成を受け入れないのである。

4. ソークラテース、ケベースに対してその混乱如何を尋ね、それが事実上ないことをもって、目下の結論を確言する・・・曰く、反体性それ自身は自分と反対のものとなることは決してない。

第五十二章 「形相そのもの」の「反対」の非受容と「形相を持つもの」のそれと

1. ソークラテース、熱・冷、雪・火（「反対そのもの」と「反対を持つもの」との例）を例示し、それらの異同を問ふ。
2. 熱と火、冷と雪、これらの相互の相違の確認
3. 雪は熱を受け入れず、熱が迫れば雪は熱に場所を譲るか或いはそこで滅ぶかをするといふこと
4. 3と同様に、火も冷がそれに迫ればその場から退去するか或いは滅ぶかをする。
5. 3 4の一般化・・・形相そのものが自らの名前で呼ばれることを要求するのみならず、形相ならぬ他の何かもまた形相の名前で呼ばれることを求めるのだ。その何かは形相そのものではないものそれが存在する時には何時もその形相の形態を持つ場合である。

6. 右の一般的なあり方のその具体例——

イ、「奇数」といふ形相はその名前を常に自分に持ち続ける。

ロ、だがしかし、他の何か、例へば「三」もまた、それは確かに「奇数であることそのこと」ではないものの「奇数たること」から離れることのないものであるといふそのために、自分自身の「三」の名前で呼ばれるとともにまた「奇数」だとも呼ばれて然るべきである。

ハ、同様に、「二」と「偶数」とについても語られること

7. 先の34の要点を集約的に確認する・・・一人「反対それ自身」が反対を非受容であるのみならず、更にはそれらの間に直接的な反対関係はなくとも何時も反対の一方を持つものであるなら、その反対を待つ者は自己のうちの反対の形相と相反する形相を非受容であり、その相反する形相がそのものに迫って来ればそのものは明らかに滅ぶか或いはその場所を譲る。

8. 再び、その具体例・・・「三」奇数」に「偶数」といふ形相が迫る場合、「三」と「二」とに反対関係なし。

第五十三章 雪・火・三・二・魂など「反対の一方」を持つものの定義

1. 「反対」が迫ると自らのうちに「反対の一方」を持つために迫り来たその「反対」を受容せず滅ぶかその場所を譲るかするさうしたものとは何かの定義へ
2. その場所が或るものによって占有されるのだが、その占有は占有するそのものの形相を持たせてであると同時に、更にはまた

「反対のその一方の形相」をも持たせることで行はれるとするとその場所であるもの、それがそのものの定義であらう。

3. 右の一般的な言ひ方の具体例

イ、「三」が占有した事物は必然的に「三」であり、かつ「奇数」である。

ロ、そこにある形相「奇数」と反対関係にある形相「偶数」は決してそこには入っては来ない。

ハ、すなはち、「三」は「偶数」とはあることの定めをともにしない（アモイラである）。

ニ、故に、非偶数である。

4. 右の23を経てあらためて「何かに対して反対関係にはないがしかし反対はこれを受け入れないもの」の定義を問ふ。

5. 右の定義が考慮すべき問題場面の例示――

イ、「三」は「偶数」とは反対関係にはないがしかし「偶数」はこれを受け入れない。何故なら、「三」は「偶数」とは反対の

「奇数」を自らにもたらしてゐるから。

ロ、イとの類例・・・「二」と「奇数」、「火」と「冷」等々

6. 4の定義の要求に応じて・・・「反対それ自身」が互ひにその反対を受け入れないばかりではなく、更に「反対を持つもの」

はその赴くところにおいて「反対の一方」をもたらしすのならば、それはそのもたらした「反対」のその「反対」を決して受け入れない。

7. 更に念を押しして――

イ、「五」は「偶数」の形相を受け入れず、「五」の二倍である「十」は「奇数」の形相を受け入れない。

ロ、「二倍」は「半分」或いは「一倍」と反対なのでもあらうが、「奇数」の形相を受け入れない。

ハ、二分の三その他二分されたものは「全体」の形相を受け入れぬし、更には三分されたものも然りである。

第五十四章 「魂」が身体にもたらず「生」はその「生」に反対の「死」を受け入れない。

1. 「分有」による原因づけの語りの安全に加へて目下の議論からするもう一つの安全な語り方のこと――

イ、「或るものが熱くなる」とは「熱がそのうちに生じてである」と愚直にかつ安全に答へることも可能であるが、更には「そのうちに火が生じてである」とも手の込んだ仕方だ答へ得る。

ロ、同様に、「身体が病気になるのは」「身体の中に病気が生じて」とも回答することを得るが、なほ「そのうちに発熱が生じて」とも答へ得る。

ハ、同様に、「数が奇数となるのはそのうちに奇数が生じて」とも回答し得るけれども、なほ「そのうちに一が生じて」とも答へ得る。

2. 愚直に原因づける安全な語り方に加へての以上の別の安全な語り方を下敷きにして――

イ、「身体の中に何か生じたならば身体は命あるものとなるか」といふ問ひの回答は、「命が生じて」と愚直に答へる答へに加へてなほ「そのうちに魂が生じてである」とも答へ得る。

ロ、すなはち、「魂」はその占有するものに常に「生」をもたらず。

ハ、「生」には「死」が反対である。

ニ、そして「魂」はそのもたらす「生」と反対の「死」を決して受け入れない。

第五十五章 「魂」の「不死」からその「不滅」へ

1. 「反対」を受け入れぬもの名づけ方――

イ、例へば「三」は非偶数のもの、「悪人」は非音楽的なものにして不正な者

ロ、同様に、「魂」は「死」を受け入れないからして不死のものである

2. 或る「反対」がその「反対」を受け入れないことが語らせるその否定、といふことから「魂もそのもたらす生に反対の死を受け入れないから不死である」とすることは、「死んでゐる魂」とは自己同一性の否定であり「魂が魂であるその限りは魂は生きてゐるのだ」とすることの謂ひである。しかし他ならぬその反対非受容といふことのその否定からして語られて来る「不死」とは「魂」のそれとしての自己同一性といふ形式的なあり方のそれとしての主張に留まり、決してそのことがそのままその「不滅」までをも明らかにするものであり得ない。その間の問題を踏まへてソークラテースは問ふ――

イ、非偶数のものはまた不滅であるなら、「三」は不滅である。

ロ、非熱であるものが不滅であれば「雪」は「熱」の接近には溶かされて滅ぶのではなく、否、その場からむしろ退去するだろう。不滅だとは溶かされぬことであるし、またそれは「冷」でもあれば「熱」を受け入れることはしないから。

ハ、同様に、非冷であるもの（火）が不滅ならば、冷である何か（雪）を「火」に近づけてもそれは消えることも滅ぶこともなく、ただその場から立ち去るのみであらう。

3. 以上を下敷きにして「不死」のものを語る――

イ、もし「不死」のものはまた「不滅」のものならば、「三」は「偶数」とならず無論「奇数」も「偶数」とはならずまた「火」が「冷」とも「熱」が「冷」とならぬそのやうに、「不死のもの」である「魂」は先づは「死」の接近に際しても「不死」ではあるだらう。

ロ、だがしかし、「偶数」の接近に際して「奇数」がその場で滅ぶとも言へるだらう、何故なら、「奇数」すなはち「非偶数」なるものはただその「非偶数」といふそれだけでは「不滅」までをも約束されてゐはしないから。（約束されてゐたのならば、「奇数」は滅んでそこに「偶数」が生ずるのではなくて、否、「奇数」は立ち去るだけだと言へたであらう）
ハ、それ故、「魂」のその「不死」はまた「不滅」までをも約束されるかどうかが問題である。

4. だが「不死」とはすなはち「永遠であること」でもあれば本質的に「破滅」の拒否を意味してゐようと、ケベースはなす。

第五十六章 「魂」の不死と不滅の結論を確かめつつも、なほそこに残される問題を言ふ。

1. ソークラテース、前章末のケベースの発言を更に敷衍して、神や生の形相そのものその他の不死なるものなどは不滅であると万人の同意するところであることを言ふ。

2. ケベース、それを受けて万人の同意もさもあれ、神々こそが同意するところだとする。
3. ソークラテース、目下の議論を総括し、不死なるものは不滅である以上、もし魂が不死であればその魂は不滅だとする。
4. 結論——
- イ、「死」が人間を襲ふ時、人間の可死的な部分は死んで行くが「不死」の部分はその「死」に場所を譲り、滅ぶことなく立ち去って行く。
- ロ、それ故「魂」は不死にして不滅なるものであり、それは死後もハデースに存在し続けるのである。
5. ケベース、それに対して完全な同意を表明しつつも、シミアースの意向を問ふ。
6. シミアース、これに対して議論の限りでは疑義はないものの問題の大きさを思ひ人間の能力のはかなさを悲観的に考へる時、心に一抹の不安を持つことを言ふ。
7. ソークラテース、心に抱く一抹の不安もさもあれ、「原因」を語るために立てた基礎定立こそが徹底的に検討さるべきことを言ふ。その検討こそは探求の成就であるのだ、と。

第五十七章 「魂」の世話の全永劫の時のためたることを説くあの世での賞罰の神話

1. ソークラテース、かくて「魂」が不死にして不滅であれば我々の心すべきことを言ふ——すなはち、「魂」の世話はこの一生涯のためだけではなく、否、全永劫の時のためにこそなされるべきであること

2. その理由——

イ、「死」がもし魂の終はりであれば悪人の悪もその「死」とともに御破算ともならうが、しかし実際には「魂」は不死なのだから悪徳からの逃れはただそれが有徳になるより他はない。すなはち——

ロ、「魂」がハデースに赴くにあたって携へるものは、ただ教育と生き方が作り上げたもののみである。それによってこそあの世で裨益され害を受けるのである。

3. あの世での賞罰の言ひ伝へ（その一）——

イ、人が死ぬと生前のその運命を見守ってゐたダイモンが待ち受けて案内を引き受け、各人を或る場所へ連れて行く。

ロ、その場所に集められた死者たちは裁きを受け、その後ダイモンとともにハデースの国へと旅立つ。

ハ、ハデースにおいて然るべき定めに出会ひ然るべき期間とどまり、別の導き手に連れられこの世に帰って来る。

ニ、この一巡りの期間は長くその周期を何遍も繰り返さねばならない。

ホ、以上からの推測——この旅路の複雑、アイスキュロスの『テレーポス』は旅路を単純だとしてゐるが、案内者の必要はそれを否定してゐる。またこの世の犠牲の儀式や風習もそのことを示してゐる。

4. あの世での賞罰の言ひ伝へ（その二）——

イ、思慮に秀でた魂のあり方・・・自らのダイモンの導きに従ひ、彼処に生ずる事柄に無知ではない。

ロ、肉体に執着を持つ魂のあり方

α 肉体や可視的領域への未練を捨て得ず逆上して反抗し、痛い目に遭った挙句に力づくで連れ去られる。

β 不浄にして不浄な行ひを敢へてなした魂は、彼の場所においても他の魂に面を背けられ道行き供となることを拒否され案内もされぬ。途方に暮れ定められた時まで彼処を彷徨ひその時に自らに相応しい場所へ否応なく送り込まれる。

ハ、清浄な魂は神々を同伴者や導き手として持ち、その相応しく定められた場所に住まふ。

第五十八章 ソークラテース、「大地」について神話を語り始める。

1. ソークラテース、「大地」について語り始める――

イ、その事実の通常の大地論者の想像を超えること

ロ、だが、その納得した説の真実の語りは困難かつ不可能である。

ハ、その確信する「大地」の形状とその様々の場所の語りは差し支へず。

2. 「大地」の形状とその諸々の場所の語りへ

イ、その第一の確信

α もし「大地」が球状で天空の中心に位置してをればその落下防止のための空気その他の強制力は不要

β 天空のすべての方向での均質と大地自身の平衡だけで十分

γ 平衡を保つものが均質なものの中心に置かれたなら偏ることはないから。

ロ、第二の確信

プラトン『パイドーン』篇内容梗概（水崎）

一一五

α 「大地」は巨大でギリシア人はその本の一部にだけ住んでゐるだけであり、似た地域は他にも沢山ありそこには様々の多くの人が住むこと

β その理由・・・「大地」の至るところに様々の窪みがあつて水・霧・空気がそこへ流れ込んでゐるが、「大地」そのものはアイテールといふ清らかな天空の中に横たはり、アイテールはまた星辰を包む。水・霧・空気はそのアイテールの沈殿物である。

3. 我々は「大地」の窪みにこそ住むのだといふこととそれに気づかずその表面に住むのだとの思ひ込み

イ、そのあり方の比喻・・・誰かが深海の底に住んで海水を通して太陽や星辰を見ながら海の表面に住んで天空を通してそれらを見てゐると思つてゐる。

ロ、そのあり方の中で――

α その鈍重と弱弱しさにより一度海の極みにまで至ることが出来ない。

β まして海上に浮かび出てこの地の海底に比しての純粹と美とを認めたことも教へられたこともない。

ハ、イロは我々のことであり、前者の「海底対海上」は我々の「窪地対大地の表面」のあり方である――

α 前者の「海水対天空」は我々の「空気対天空」である。

β 前者が海の極みに至ることが出来ないのは我々が空気の極みまで至ることが出来ないこと

γ 前者が海上に見る純粹と美は我々が偽りなき天空と眞の光芒とを彼処で見ること

δ 前者の海底での岩礁・砂・泥と我々の大地の美觀との差は我々の許にある事物と彼処にあるものとのそれである。

4. 今はミュートスを語るをよしとしようとのソークラテースとシミアースの相互の同意

第五十九章 「大地」の表面に見出される美についての神話

1. 「大地」の表面に見出されるものの神話――

イ、十二面の革で縫ひ合はされた鞆のやうに判然と色分けされた多彩に上方からは見られる。

ロ、その色彩は我々の画家たちがその標本の一部として使ふものであり、大地はそれらの色彩で彩りされてゐる。そして遥かに純粹で光輝がある。その紺碧・金色・白亜の驚嘆と一層の多彩

ハ、ロの理由……大地の窪みは水と空気に満ち、大地は多彩において燦く色調を現して、その全体が多彩の一つの連続を呈するから。

2. 「大地」の上に成長する者、山々、石などの透明と美――

イ、我々のところでの紅玉・碧玉・緑石などは真の「大地」の石のかけらに過ぎず、彼処ではすべては宝石でありその美はこの地のその美を遙かに越える。

ロ、イの美の理由……彼処では石は純粹であり、この地のそのやうに腐食毀損されてはゐない。大地の窪みへの流入こそが醜さと疾病とをもたらす。

ハ、イへの敷衍……上方の「大地」の純粹な寶石による美、宝石の大地表面への露出、多数と形の大きさ、至るところでの存

在、至福なる者のみへの景観

3. 「人間たち」の大地の面への住み方――

イ、内陸部に住む。

ロ、空気のとりに住む。

ハ、大陸近くその周りを空気が取り囲む島々に住む。

ニ、我々の「水や海対空気」は彼処の人々の「空気対アイテール」

ホ、彼処での四季のよき配合と人々の無病長生き、視覚・聴覚・知のはたらきの卓越、これは「水対空気」の比で「空気対アイ

テール」の比があり、彼処の人々はアイテールの純粹を享受する。

4. 彼処の人々の聖なる杜や社の所有と神々との直接する交はり、太陽・月・星辰をすべて真実あるがままに見ること、その他の至福の享受

第六十章 「大地」の内部の多くの地域についての神話

1. 「大地」の窪みであるその内部の多くの地域の存在

イ、その或る地域は我々の住んでゐるここより深くまたより広く開かれてゐる。

ロ、或る地域はより深いが開きは狭い。

ハ、或る地域は深さはより浅いが開きはより広い。

2. それら諸地域間の通路のこと——

イ、そこを莫大な水が相互に流れ合ふ。

ロ、「大地」の内部の巨大な不尽の熱湯或いは冷水に満たされた流れ

ハ、「大地」の内部の巨大な火、様々の大河、泥濘の多くの流れ

ニ、泥濘の比較的に清らかなものと全くの泥の状態と、そのシケリーアアでの溶岩の流れに先立つ泥の河と溶岩の流れとによる
比喩

3. 諸々の地域の以上の流れの到来によっての満たされ

4. 諸々の「流れ」に上下動を与へる動について——

イ、「大地」の裂け目の最大で大地全体を貫通するところの、ホメーロスその他の詩人らが語るタルタロスの存在

ロ、諸々の河はこのタルタロスなる裂け目に流入しそこから流出し、そしてその通過する「大地」の性質に応じてその性状となる。

ハ、その「流入・流出」の理由——

α タルタロスには流体を支へ保持する底がなく、流体は上下に動揺し、空気もそしてその周囲の気流も同じ動きを動く。すなはち、空気や気流は流体の動に従ふ。

β その気流は人の呼吸の如くタルタロスにおいて流体とともに動きつつ、出入りの都度激しい風を起す。

5. 右の3の詳細——

プラトン『パイドーン』篇内容梗概（水崎）

一一九

イ、水の下方への退きは彼処の側の様々の流れの道に流れ込み、それらを満たす。

ロ、彼処を去ってこちら側へとすめばこちらの流れの道を満たす。

ハ、その満たされた水は水路を通り地中を流れ導かれた地域で海・湖・河・泉を作る。

6. そこから再度地下を通りタルタロスへと還流する——

イ、その流入口の流出口に対する位置関係……遥かに下方の場合や僅か下方の場合があるが、ともかくも下方である。

ロ、タルタロスへの流入の地点の位置関係……流出口の反対側の半球の場合と同じ側の半球での場合と

ハ、還流のあり方——

α 「大地」の周りを一周する場合

β 一周の後、出来るだけ下方に下りて行って流入口を求める場合

γ 「下方」とは行ってもそれは大地の中心まで。何故なら、それ以上は上り坂となるから。

第六十一章 特筆すべき四つの大河

1. 特筆さるべき四つの大河のうち最大で大地の最も外側を流れるオーケアノスのこと

2. 次いでアケローン（冥界の河）——

イ、彼処の側にあつてオーケアノスと相對し、それと反対方向に流れる。

ロ、荒涼とした地域を経めぐりアケルーシアス湖に達する。

ハ、アケルーシアス湖はそこに死者らの大半の魂が至り着き長短の一定期間魂が留まり、そこから再生へと送り出されるところ

3. 第三の河のピュリピュレゲトーン――

イ、これはオーケアノスとアケローンとの中間辺りからタルタロスを流れ出る。

ロ、流出口のすぐ近くで莫大な火に燃える広大な地域へと一度流れ込み、地中海よりも大きい水も泥も煮え滾る湖を作る。

ハ、次いで「大地」をめぐりめぐりして各地に至りつつ、またアケルーシアス湖の極みまで達する。

ニ、だがこの湖の水とは混じり合はず、何度も地下を経めぐった後、タルタロスのより下方に流れ込む。

ホ、この河の運ぶ溶岩流は地上の様々な地点にその破片を噴出してゐる。

4. 第四の河コーキュトス――

イ、ピュリピュレゲトーンと彼処の側で相対する。

ロ、それは最初に「ステュギオス（慄きの地）」といふ常ならぬ恐怖と荒々しさとに満ちその地のすべてが緑青色に覆はれた地域に至る。

ハ、その作る湖はステュクス湖と呼ばれる。

ニ、流れはステュクス湖に落ち込んで異常な力を獲得し地中にもぐり地中をめぐり、ピュリピュレゲトーンとは反対の方向に進み、アケルーシアス湖のところまで反対側から来てそれに出会う。

ホ、その流れは他の水とは混ざらない。

へ、地中を経めぐってピュリピュレゲトーンとは反対の側でタルタロスに流れ込む。

ト、詩人たちはコーキュトスと呼ぶ。

第六十二章 再び死後の定めについて

1. 死者たちの各々のダイモーンに導かれての或る場所での裁き――

イ、優れた生を送り敬虔に生きた者

ロ、然らざる者

2. その裁きの一、大した善事も悪事もなく生を終へたと判定された者の場合――

イ、アケローンのあるところまで行き、彼の舟に乗り、アケルーション湖に至る。そこで住まひし自らを清めつつ不正を犯した者ならその罰を受けて不正の咎めから解放され、善行をなした者ならばその褒章を受ける。

3. その裁きの二、その罪過は余りにも大きく癒し難しと判定された者の場合――

イ、それは神のもの度重なる大掛かりな冒流行為であり、不正無法の殺人などである。

ロ、その罪を犯した者はその悪行に相応しい定めとしてタルタロスに投げ込まれ、二度と出ることはない。

4. その裁きの三、癒し得るが罪過は大と判定された者の場合――

イ、それは一時の激怒から父母に暴虐を犯したが後悔の生を過した者の場合や似た事情で殺人を犯した者の場合である。

ロ、先づタルタロスに落ちるは必定であるが、そこで一年が経てば逆巻く波でその外へと投げ出される。

ハ、殺人者はコーキュトスの流れに運ばれ、父母に暴虐を加へた者はピュリピュレゲトーンに運ばれる。

ニ、双方が運ばれてアケルシシアス湖の辺りまで来ると、彼らは彼らの被害者の名前を呼び哀願して流れを出て湖に入ることとその受け入れを乞ふ。

ホ、聞き入れられれば河を出て苦痛は止むが、然らざれば再度タルタロスに落ち同じことを繰り返す。

ヘ、これは裁き手が彼らに課した刑罰である。

5. その裁きの四、取り分けて秀でてその生涯を敬虔に送ったと判定された者の場合――

イ、「大地」の内部の地域からあたかも牢獄からといふやうに自由となり解放され、彼の上方の清浄な地へ至り、まことの大地の上に住まふ。

ロ、中でも智慧に親しむ営みによって自らを完璧に浄化しきった者は、全き仕方て肉体を離れて生き、真の大地の面よりも更に美しい住まひへと至る。

ハ、だがそれを明らかにするのは困難であり、また語り明かすべき余裕がない。

6. 以上の死後の定めは、我々がこの生において徳と智慮に与るべき由縁を教へるものである。その与るべき努力の果てにあるものは美しくかつ希望は大きい。

第六十三章 神話（ミュートス）を語り終へて

1. ミュートスをそのまま真実だと断言するのは知性（ヌース）を持つ者には相応しくはないが、魂が不死だと明らかになった以上、魂とその住処とについて思ひを持つことは相応しいことであり、思ひにかける価値はあるだらう。
2. 思ひへの賭けは美しく、魅惑の歌として我々は自らに唱へるべし。それ故に、神話を長々と語ったのだ。
3. 思ひを懸けるに足るだけのこともものために、人は自らの魂に安んずべきこと——
イ、肉体に関する快樂と装ひとを外的にして有害だとしてこれに訣別し、ひたすら学の悦びに熱中した者は。
ロ、思慮・正義・勇氣・自由・真実でその魂を飾りハデースへの旅立ちのときを待つ者は。
4. ソークラテース、今や沐浴に向かふべき時だと言ふ。

第六十四章 ソークラテースを埋葬出来るか。美しく語るべき論し

1. クリトーン、ソークラテースに言ひ残すべきことの有無を尋ねる。
2. ソークラテース返して自己自身への配慮のみと答へる。
3. クリトーン、それを承知しつつも“ソークラテースの埋葬”は如何と言ふ。
4. ソークラテース、答へて（その一）——

イ、もしクリトーンたちがその場に居る者たちがソークラテースを掴まへて放さず、ソークラテースは逃れ去ることをしないのであれば、埋葬はその欲する通りにすべきこと

ロ、ソークラテースとは何なのか。

α もうすぐ埋葬される死体なのか――

β 対話をし議論の一つ一つを然るべくそこに置いた者なのか。

ハ、クリトーンは右のαだと思ひ、ソークラテースの埋葬云々を口にした。

ニ、ソークラテースは「その死後にその魂は立ち去るのだ」としたのだったが、クリトーンには無駄話にも過ぎなかったか、その「立ち去り」の話は皆と自分との慰めになされたのに。

5. ソークラテース、答へて（その二）――

イ、臨席の友たちに対する保証の要求――

α クリトーンはソークラテース裁判において裁判官たちにソークラテースは逃亡すまじと保証した。

β 友たちは反対にソークラテースはその死後は誓ってこの地を立ち去るのだと保証すべし。

ロ、右のβの保証があればクリトーンのソークラテースの死体の焼却や埋葬も辛くなくなって、弔ひに当たっても「ソークラテースを安置する、葬送する、埋葬する」とは口にしなくなるだらう。

ハ、美しく立派に語ることの論し。さうせぬことは魂への禍ひの植ゑつけともなること

第六十五章 家族への言ひ残し、刑務委員の下役の讃嘆、彼への讃嘆、死を迎へる矜持

1. ソークラテース沐浴へ、クリトーンの従ひ、残された者らのしたことと思つたこと、議論の再検討や自らの不幸の思ひ
2. ソークラテースの沐浴後のその子供たちと身内の女たちとの登場、ソークラテースの彼らとの話し合ひ、言ひ残し、彼らへの
帰宅の言ひつけ、再び友らの許へ

3. 日没間近、刑務委員の下役の者の入室と告知

イ、ソークラテースの品性への讃嘆と期待

ロ、毒を飲むべき告知

4. ソークラテース、致し方のない刑死を心安らかに耐へるやうにとの言葉を快く聞き、その下役の男の立派だったことをも言ふ。
とともに毒を持って来べき手配をクリトーンに依頼する。

5. クリトーン、他人の場合、大いに飲食し性的な交はりにまで及ぶことのあるを言ひ、急ぐことはないのだと言ふ。

6. ソークラテース、その矜持を語る。

第六十六章 毒杯を仰いで後のソークラテースと一同と

1. 毒を手渡す役目の男の入室と彼へのソークラテースのどうすべきかの問ひ、その答へ

2. 平然とソークラテース毒を受け取りつつ或る者のために灌ぐことの適否を問ふ。
3. 毒は適量だけだとの答へにソークラテース神々に旅路の幸を祈るだけに止め、何のこだはりもなく安々と飲み干す。
4. それを見た一同の愁嘆——
イ、ソークラテースの身の上をといふよりは我と我が身のために泣いたこと
ロ、クリトーンは涙を堪へ切れずに席を外し、アポッロドーロスの叫喚は人々の取り乱しを誘ったこと
5. ソークラテースの「死は静謐のうちにこそ」との一同の窘めと一同の恥ぢ入り
6. 毒を飲んだソークラテースの様子、脚が重くなる、仰向けに寝る、感覚が下から上へと次第になくなり、体が冷たく硬直して来る、心臓まで来たら最後となる。
7. すでに下腹の辺りが冷たくなってゐた時にソークラテース、顔の覆衣を取って、アスクレピオスへの鶏のお供へをクリトーンに頼む。最後の言葉
8. クリトーンのその約束と他の言ひ残しの有無の尋ね
9. ソークラテースの無言、少し経っての身体の痙攣、両眼の座り。クリトーン、その眼を閉ぢる。

第六十七章 結び

(平成二十年三月八日 午後二時四十分完了)